

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十七年八月二十五日 印刷
昭和四十七年九月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五四四号



No. 544

九月号

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまたろ
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

誇る
海岸美を
風光明媚な



HORAI



蓬萊商品の目印

アイスクャンデー

あずき・メロン・パイナップル・ミルク・チョコ

ソフトクリーム

バニラ・ミックス・チョコ



〔出張販売〕高島屋 そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店

大 阪・なんば



孫とお別れジャンボも出足にぶりそう
 ききわける孫をも一度抱き上げる
 ロスアンゼルスは消えても孫の顔孫の顔
 としよりの冷や水夢でなかった今朝の幸
 としよりの冷や水合掌のころなり

中島生々庵

これから五〇年もたつと、東京付近の緑は全滅すると科学技術庁からの報告は重大な警告であった。樹木のいのちは大変長く中国や北米の奥地には数千年という気の遠くなるような老巨木が生きながらえて居ると聞いていた。

たまたま先月サンフランシスコ郊外で、国立大森林公園を見物する機会を得たが、その壮観さには驚いた。その驚きよりも土産物店に、ビニール袋に入れた20cm位の木片を売っていた。この土地に千年の齢を重ねた巨樹の一片である。購される覚悟で買い求め大阪

に持ち帰り、説明書通りに水盤に立てて毎日水を吹きかけ続けると、木片のあちこちに米粒程の青白い芽が出初め二か月たった今日では丁度釣菖蒲の恰好に若葉をつけた茎が密生し、根らしいものも出来てくる。

一握りの木片にこれ程の逞しいいのちがかくされているとは将に驚きでもあった。又当分は科学の力が大自然の足許にも近づけないし、近づこうとする行為は神への冒瀆とさえ感じさせられた。



主幹夫妻を囲むロス、つばめ時社の人々

川柳塔九月号

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

平凡な夫婦で人に羨やまれ

山内静水

川柳塔九月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

樹のいのち

中島生々庵 (1)

川柳忌に思う

川村好郎 (2)

川傍柳初篇研究

(百十)

川村好郎 (2)

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

俳諧紋次郎

東野大八 (24)

川柳塔 (同人作品)

西尾葉選 (4)

近作柳樽

菊沢小松園選 (30)

一分間の柳論

長野文庫 (45)

秀句鑑賞 (同人吟)

(近作柳樽)

橘高薫風 (28)

ブレイキ

若本多久志 (29)

「旅人」以後の麻生路郎作品 (19)

戸田古方 (26)

川柳五十三次 (二十三)

富士野鞍馬 (38)

川柳忌に思う

川村好郎

季節はずれの話になるが、昔西行法師が春の一日、大和吉野山に登って、満山爛漫と咲く桜を眺め、

昔たれかかる桜を植えおきて

芳野を花の山となしけん

と詠んだと伝えられている。

数年前春まだ浅い三月に私は吉野へ吟行したことがある。勿論下の千本もまだ桜は蕾が固い。その桜林の中に数人の植木職の方々が桜の木の手入れをしているのを見た。茶店で聞けば、幹に苔が葡い上れば樹は弱ってしまう。同じ場所同じ土に二三年もその儘にしておけばよい花は咲かない。それで毎年早春に苔を落し、場所を植え変え、土を変え、このように懸命に手入れをするのだそうだが、昔誰が桜を吉野に植え付けたかは知らぬが、決してそのままではなく、培い育て引継ぎ引継がれて西行法師をしてかく詠ましめ、尚今日花の吉野山として天下にその名を知らしめているのである。

初代柄井川柳を始祖として今から約二百年

近詠

娘の結婚

劫火連作

あゝ川柳塔社物故同人

梅里さんと梅志さんの思い出

色紙・短冊が相伴して

若本あき坊氏逝く

山の句会一題

百見は一聞に如かず

きのう・きょう

雅号ぶつちやげばなし

初歩教室

大萬川柳「鈍行」

柳界展望

本社八月句会

各地柳壇

一路集

編集後記

諸家

高鷲亜鈍

菊沢小松園

不二一三夫

吉田水車

八木摩天郎

明春・曉舟

天笑・岳人・悦郎

中川晃男

本多柳志

久志良・錦風・美代

本田恵二朗

川村好郎選

(薫風)

(庸佑)

(文秋)

遠山可住選

植山客遊子選

不二一三夫選

(二三夫・葉子)

(23)

(27)

(27)

(40)

(41)

(42)

(43)

(44)

(49)

(51)

(57)

(38)

(50)

(54)

(58)

(46)

(46)

(47)

(65)

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

私の句

自叙伝に恋の頁の遠まわし

(路郎)

林野 麿光

前に植えられた川柳の花は時代と共に引き継がれ、阪井久良俊、井上剣花坊阿氏によって桜花の真価を世に示し、更に路郎水府三太郎紋太等の大植木師によって培われ、育成されて、盆栽的川柳より社会的川柳の革新に発展し、短詩文学川柳の地位を確保された。

かくてこれ等の大植木師は次々とこの世を去ってゆかれた。そして我々に取次がれ受け継いできた。

昨年来「ふあうすと」に連載されている「柳界新地図」を読み、全山桜花満開とはゆかずとも現在名のある吟社が全国にこんなにもあるのかと驚いた。そしてその全国に咲き誇る花はどうだろうか。旧態依然もう枯れかかっている花もある。一重、八重桜もある。中にはとても桜と思えぬ色、形の変った花もある。

しかし西行法師をして思わず佇ち止らせ桜花独得の美に恍惚として感歎させたような胸を打たせる川柳の花を咲かせない我々である。これから先きどんな桜が咲くだろうか。ほんとうの桜はどれだろうか。ほんとうの川柳とはどれだろうか。枯らしてはならない。培わねばならない。

九月は川柳忌の月である。始祖柳翁は幽界から今日の柳界をどのようにご覧になっているだろうか。



西尾 榮選

和歌山市 垂井葵水

働らいた知恵で鎖を解く女
脊を見せるとき崩れてるサングラス
一生を誓った仲の息が切れ
飲み直すコップに愚痴が盛り上る
つき放す言葉も愛も持っていない
身の程を知る石段の途中にて

松原市 谷垣史好

革命に縁なき顔よ満員車
銅像の視線庶民を頭越し
ワンタッチ傍若無人に開く傘
地球儀にこんな綺麗な海があり
お帳場の隅で仲居が飲む胃散
ふっくらと肥えた娘がいるベーカーリー

八尾市 香川酔々

博物誌

蚊柱の中で音頭の太鼓打ち
朝顔が咲き農学部夏休み
領界を侵すなかれと夜の蛙
補償して欲しい片輪の蟹歩く
縄張りを水輪がつくるみずすまし
絵硝子の聖母の恵み受ける蝶

高槻市 若柳潮花

嘘ついて帰す男の手を握り
生ビールついの浴衣を抜ける風
虫籠へあしたを生きる霧を吹き
嘘嘘嘘泣いた涙も泣かせたも
占いが添えると出たらどおしよう
梅川へ忍び逢う夜の木戸が鳴り

八尾市 高杉鬼遊

角栄かそうか集金値切られる
人前で呼ぶ妻の名があらたまり

ひよつとこの面で女が気を許し
唇を赦しただけで病んでゐる

愚かなることと思えどすこし炎え
施餓鬼する水子に父の名は書かず

石見路

大阪市 正本水客

石見瓦の赤が旅人の眼にさせる

朝の茶へ寺は野鳥の聲が湧く

屹立し削立して岩羅漢になる

自給自足して尼僧の暮し音もせず（法船庵）

夏みかんの原樹漂着の歴史語りかけ

町の湯へ下駄も傘もみな共用の面白さ

会うことが別れと思う人を持ち
大阪市 本多柳志

参観日嬉しいママの美しさ

趣旨は賛成して寄付金は断られ

木曽路吟行

父の日の父は木曽路の旅に居り

なげえわらじ履いて行きてえ宿場街

旅籠屋ののれん行灯長火鉢

富田林市 岩田美代

愚かさや自負の見せ場と言うポーズ

東京友人と再会（三句）

東京で自分になった灯を歩く

あれもこれも支離滅裂に打ち明ける

美しく老いる約束して別れ

次男営業独立（一句）

インタビューのない主役から下りる

木曽路志野茶碗頂く

弾むもの抱いて志野の茶がまろし

香川県 三井酔夢

虹をみた日から女の夢育つ

燃えきって残すものなき性こわし

すざまじきものに女のうす笑い

自画像にうす紫の花を置く

花作り句作り淋しいとは言わず

あきらめが感謝になって夫婦古い

青森市 工藤甲吉

天皇のお言葉希望して終わる

学制百年赤軍派をつくり

人間の方でもはやる使い捨て

金持ちのケンカ貧乏見てるだけ

来世の契り女房に断わられ

大阪市 山川阿茶

何事も自分が軸と思ひこみ

〇脚と知っているからミニはかず

都々逸も唄えぬ落語家売れている

方円に従う水の大あばれ

齒科通院

まだ十本親からもらった歯が残る

倉敷市 水粉千翁

旅人の夢へ大樹は枝を張り
茶がうまいある日を話す人と居り
今日もまたうちの広さをたしかめる
耐えて来た拳を悔いもなく開き
また明日へとどく背伸びをはばからず

岡山県 浜田久米雄

将来のためだと思ひ孫叱る
孫歩くすこしは尻を振って見せ
メンスとは神聖なものの孫の年令
孫の目にじいちゃんという男あり
出来事を話せば孫の目がきれい

豊中市 戸田古方

色がついてたら錦鯉にしてみまい
汚染米となるかもしれぬ田植すむ
ここで聞く鳩は野鳥の仲間やろ
ブラットへ来てる犬お前も電車すきなんか
あみ船に乗ってもPCBがどうのこの

倉敷市 本田恵二朗

皇太子夫妻迎えた儀に列し
中々のスターでおわす両殿下
皇太子より美智子妃へ切るシヤッター
美智子妃の微笑みしかと写しとり
曾我の墓仲よく濡れるみどり雨

尼崎市 黒川紫香

自転車で来るおじいちゃん親しまれ
検針をじいわり犬の眼が見上げ
愚痴ばかり云って会社辞めもせず
聞いてやるつもりの方が酔いはじめ
奥びわ湖

大阪市 西出一栄

釣立ての鮎の匂いにうごく鼻
見るだけの画廊で画家に会釈され
かたくなな老の心境恥ずる日も
祖々母の五十回忌に大わらわ
春夏秋冬六畳一間の城出です

大阪市 福井野迷路

勝ち馬は今日の騒ぎが腑におちず
考えるお城の道か虹のまち
テレビこわれ己が心へ里帰り
おしめりが過ぎて列島水びたし
ゲート人生論から

門真市 福島鉄児

公害の街に雑草たくましく
大穴のそれから人生狂い出し
廻りくどい話結局金のこと
老眼鏡一つで夫婦こと足りる
結論は明日へ持ち越す酒の宴

鳥取市 河村 日満

櫛原にて(二句)

蒸発は当然氷のような妻

宇部市

石川侃流洞

ひよっとしたらの欲寝かされてしまいいけり
手を振れば手を振る人の素朴にて

湯の山にて(三句)

ストレスへ遠く妻子を担う肩
無難作に見せて年季の槌の音
駅長の日焼けをみんなけむたがり
蟻の穴よく見ろ素手の奴もいる
妻や子と遠くに住んで酒の量

ロープウェイにお休みがある金曜日
百万円の石ごろごろと谿に沿う

ホテル継ぎ足して温泉の街のびにのび

宝塚市 傍島 静馬

スタミナ消滅して行います

退職金心許なくなるあせり

マイホームの夢へ青春入れあげる

うまいこと撒いたつもりがバーで遭い

送りがな付けて取ったり取って付けたり

藤井寺市 西 いわを

緑なるは塚 人間臭は無し

声上げて女は泣けるから嬉し

如才なだけで頼りにならぬ人

オブラートに包まれている暮しかな

生ま臭い話に人は生きて行く

岡山県 直原七面山

お金が出来て保守へ転向
指折る過去へ青く澄む空

藁が立ってる女の冗舌

キレイなままで別れましょうと女から

すべり込んだのが審判をにらみ上げ
あやしげな男の口が味方する
膝少し崩して距離をちぢめる氣
手のひらで豆腐まだまだ切れぬ嫁
まだ冷えてない栓を抜く不意な客

呉市

林野甦光

農業を使わぬ村の蚊に喰われ
甘えられる家だと孫も知って居り
若いとも自負し齡かなとも思い
冷蔵庫で落ちつく暇もないビール
植木鉢の土もやっぱり都会の値

大阪市

金井文秋

連休が明けて魂抜けている
心交りをきれいな嘘で飾るのか
殻脱げば蝶は花訪う羽根を得る
降る雨は降るにまかせて読み耽り
昼の酒日曜の雨捨てがたし

神戸市

小浜牧人

松江市 小林 孤呂二

やがて子の歩調にあわす日が楽し
モザイクタイル妻の好みの色にする
病妹の今日も千羽鶴を折り
我慢することの多い世で酒が売れ
扇風機陳情の方は顔にうけ

大阪市 江城 修史

茫洋の海に還らぬ父を呼ぶ
言い切れぬ嘘もつ男のセクト主義
逢い逢うてロマンに遠き距離を知る
底辺に生きる心を支えあい
いつの日か解ける誤解へ目をつむり

西宮市 藤村 ベ女

片腕は君に捧げた袖がたれ
袖カバー男仕事の顔になり
郷里へ来て河鹿の聲に寝そびれる
茄子の色ますます冴えて梅雨晴れる
泣くまいと堪えてる孫の頭なで

大阪市 児島 与呂志

おばはんの八ツ当りの訳知っている
その辺のかけ引き知ってる顔で飲み
酔うている足もう一步をはずさない
つまらない意地が女を嫁がせず
嘘ついたとたんに詫を云える女

出雲市 原 独仙

その破調他也聴けよがしの叱咤なり

父うちやんの技術売る服油服

判コ押すだけの仕事も勤労者

くされ縁などと金婚まで迎え

老衰の肌も寒暑は容赦せず

生駒市 草 深 醉 升

出すものを出して頼めと御託宣

切り売りのような御経の愛想なさ

まだ五カ月孫の名決めて笑われる

あっけない死にかた電池が切れたよう

なまじっか敵愛すればつけあがり

鳥取県 清 水 一 保

いかに世は変れど我に有る親娘

説得に來て人生を聞いて去に

ネクタイに頼りませんと云う若さ

信じてる互いと知っている激論

自民党新総裁決まる

行く末は同じ運命の椅子を追ひ

守口市 羽 原 静 歩

アメリカ雜詠

永遠の罪を流してナイアガラ(ナイアガラ瀑布)

好奇心チョッピリ賭けたラスベガス(ラスベガス)

キャニオンの頂上雨は横なぐり(グランドキャニオン)

天地の怒りの貌かフーバーダム()
ロングビーチ太平洋を見遙かす(ロングビーチ)

大阪市 室谷 徹 舟

呼吸きって上ったとたんだア閉り

P C B 信用してたに鯨もか

酒飲まぬ人で仲裁骨が折れ

実兄危篤

兄危篤時計が容赦なく廻る

重病へ暮らしのリズム狂たまま

神戸市 仲 どんたく

母へ花捧げ披露宴涙あり

白ヘルで警備保障の閑な顔

あの頃は広過ぎたつけ御堂筋

指名料膝にお尻をのせてくれ

あっしにはかわりねえこと宝石展

鳥取県 鈴木村 諷子

既婚者ときいて無縁のひとに見え

ハイマツチハイ靴べらとチップ言い

忙しさをかこち女の多忙好き

アカシヤの香り若さのすばらしさ

風鈴屋音に値札をはって売り

倉敷市 野田 素身 郎

単身赴任蚊取線香まで用意

これきりにしよう別れが辛いから

大ジョッキ飲み干し口紅引き直し

ノースリーブ触りたくなるような黒子
みんな散髪しているノークー観光団

和歌山市 野村 太茂 津

公害は有難度いです蚊帳要らんです

宗匠というには惜しいベレー帽

地下街の季節贗の花贗の川

遠い青春逢えば孫ある未亡人

田植唄ヒップ竝んでいるリズム

藤井寺市 吉岡 美房

疑うているかと巡査居直られ

けた違い詐欺堂々と捕えられ

大阪の夜空を画布に大火花

ちよっと派手やるかと似合うつもりかい

久しぶり料理すっかり煮えつまり

大阪市 中川 滋 雀

学歴はないが座れる椅子と知れ

見通しがついた無言の眉となる

みくみればカチンと九回裏で逃げ

草臥れた背に追い打ちの陽を背負い

母の忌の灯りが閉じた目にしみる

美弥市 安平 次弘 道

口あけているのに歯医者話好き

ブルドーザー土方は力もてあまし

スモッグへの自衛鼻毛が早くのび

我は海の子だが泳げる海がない

光化学スモッグへ都民はモルモット

姫路市 村上春巳

目覚しに起され外は梅雨の雨

超ミニの娘がありうっかりしておれず

岡山で乗替えうどんを喰う旅情

書置の通りに飯が炊けてくれ

缶詰も結構いける妻の留守

倉敷市 小野克枝

何気ないしぐさ女として習い

馬鹿踊りする人生があつてよい

信心を強制する瞳の不幸せ

鏡拭く夫に一本とられた日

人の金一時停車の小商い

米子市 林瑞枝

胸熱う善意の声を聞く受話器

夫婦喧嘩笑つて見てたらこつち向き

肩竝べ青春がそこにある歩巾

楽屋裏見られ親しみ湧くふたり

冒険に似る婚約の恋芽生え

大阪市 有信新之助

言葉乏しき恋からだで知れたがり

会議かと思えばマージャンするうどん

堕ちたから男の腕に縋るのよ

靴のまま上るロビーに肚を決め

サービスが良すぎて益気忙しい

尼崎市 高津徹也

家系図に歴史の人を発見し

冷蔵庫いわば小さな城なりし

反対をしてもいいかと鏡に問う

目じるしにしておこうペン太る

俺の外側君の外側銘すべし

倉敷市 竹内翁童

ほんとうの怒りは声になって出ず

自画像がこわれそうで黙秘権

引退の出来る自由がうらやまし

遺伝かも知れぬ通知表を叱かれな

行間の苦勞に生きる編集者

島根県 小砂白汀

汗かいて見たい日もある熱帯魚

太陽の匂いで孫にとびつかれ

砂もろし握ればにぎるほどもろし

ひたむきに駄馬走らせてくれた瞳よ

花びらを喰う虫花の色でくる

大東市 土岐トク子

出稼ぎの帰らぬ旅へひとり発ち
宿命と云うには余りに悲しゅうて

女です妻です今夜が峠です

噴煙も泣いてくれるか若狭丸
誠実と責任教え子に咲かせ

兵庫県 遠山可住

国道が通ってからの意志疎通

なぜ知らさんだとおそかった見舞

まざまざと女の強さ冷ややかさ

植木屋が七人かかる松を継ぎ

温泉なと行く気で年を重ねたが

京都市 松川杜的

がむしやらに働く疑問を身を感じ

退役のじわじわ原色遠ざかり

入歯哀れ南京豆にあなどられ

借りものの歯と尺八知っていた

倅せな窓辺五重塔光る

竹原市 森井菁居

ついて来る影分身の俺だった

はしやいでも孤独酔い痴れても孤独

酒呑みにして酔い切れぬわびしい日

さらけ出す不満はたかが知れており

脚色をしても悲劇を酒にする

京都市 都倉求芽

あじさいの輝き傘を寄せつけず

振り返るたびに後悔大きくなり

とり敢えず鷄呑みにしといて場をしのぎ

暗い間寝られる鳥がうらやまし

人生の重荷持ち替える手は知らず

東京都 増田次章

知る権利使わぬ幸せ知っており

豪雨示唆日本列島改造論

呼びつけて顔見たとたん用忘れ

引退の重役小さな好々爺

妻の留守わかつているがやや不満

島根県 堀江正朗

手さぐりで新幹線の乗り心地

旅話いっきに出せば吃るだけ

妻といて心わびしい雨の音

こんな時めくらは手持ちぶさたなり

当然の事を聞かれて迷うとき

松江市 恒松町紅

真剣な話に女目をそらし

人前で女房を叱る睦まじさ

お隣りのピアノわからぬ曲で鳴り

夕焼けがこんな綺麗な水害地

山と川狂わせ日本揺れている

岡山市 川端 柳子

小さな善意尾ヒレも美しく戻る

長男も次男もわが家の皇太子

海静か女の歴史涯しなく

愛小出しせずとも溢れいづるもの

小ざっぱり着替え夏ばて吹きとばし

島根県 大森 孝華

ぬぎ切れぬ殻を背おってかたつむり

旅に出る傘はわが手でさがしてき

仏にもなれず念珠の意地へ切れ

肉親へふれる心は涙ぐみ

霧囲気の野心へそっと座をはずし

堺市 伏見 茂美

もう寝たの聞けばくるりと向きをかえ

妬いてんのと違うの死んでからのこと

ミシン踏む寡婦派手好きでお人好し

木曾路にて

妻籠宿夢は紅緒のわらじ履き

道連れは旅人さんになっている

富田林市 木村 弥栄子

文明のあやまち過剰と云う地獄

文明へ人跡未踏の地に逃れ

雨宿りする胸ほしい細い肩

入信で戦う自分の中の敵

かかる世にきれいに生きて来たを悔い

新宮市 川上^{久司改め}大輪

切り札が出せずコーヒーかき廻す

颯爽と歩く日少しは持ち合わせ

真新し白さが怖い日記帳

化粧している時女疲れない

「ただいま」は妻に聞こえる声で言い

大阪市 橘 高薫風

逸見灯竿氏を祝し

灯竿と号しその灯が古稀になり

板尾岳人君へ

山男 山の画集に汗おとす

浄瑠璃寺にて

見残した夢を見ている塔の朱よ

塔の朱の水に映れば浄土の朱

立たせたき人 睡蓮と塔の間

大阪市 不二田 一三夫

落丁あり乱丁あり人間です

そこまでは知ってるタバコのけむをはき

おんなじレコードばかり掛けて人生

寄席

テレビ様ラジオ様お客様

長髪にもう目をつむるNHK

日中交乗り遅れるなとばかり
出雲市
尼 緑之助

豪雨襲来

有為天変来るべきものが来た豪雨
気の毒なニュース仰天のためいき
どこへ行っているやら豚も水の中

高槻市
福田 丁路

その辺のところ宜敷く頼まれる
平っちゃらで花嫁さんが舌を出し
日の光求めて草が横に延び

マイカーが靡き秘境落ちぶれる

松江市
中 川 晃 男

目抜き通りをお先に御免ゴムボート
人間の本能という泣きどころ

咲き盛るあじさいに道をとられたり
ひまわりの時には太陽に背きたし

名古屋市
吉 田 水 車

首相退陣声明

佐藤さん惜しや千仞の功を欠き
謝ることに馴れるもかなし宮仕え
身体髪膚染めたりちぢれたり

冷房が二三歩がとこついて来る

倉敷市
小 幡 里 風

妥協した今宵の妻が美しい
面接へ未来をかけた深呼吸
硝子張りの中からもれた小さい嘘
本心が迷う札東垣間見る

姫路市
隠 岐 不 醉

急用があるのかスピード百も出し
そりや我慢出来まいが我慢させ
富士山で土産にわかめ買わされた
横断の母の脊中で旗をふり

松江市
岡 崎 祥 月

穴道湖もはらんピンチ、ピンチ、ピンチ
水の都も水魔と化したおそろしさ
敵のないくらししみじみありがたや
真実目とは世渡り下手な人のこと

高槻市
山 田 季 賛

猫の方が僕の気性を知っている
旅づかれ妻に話せば叱られる
忙しい忙しいとは別の旅プラン
年度末工事へ石橋叩かれる

伊丹市
小 川 静 観 堂

処女という重荷いつまで負うつもり

桜貝の倅せにまだ触れもせず

大阪市 河井 庸 佑

生き形身イメージ頒けるに一ト苦勞
生き形身のつもりの本をわけはじめ

大阪市 天 正 千 梢

老化現象かものを溜めすぎる

腹割って話しているに受け付けず
バスで来た山頂なので味気なく
一歩後退二歩前進の策と決め
先方がとくに読んだ下心

倫理的評価へ貝になり切れず

平田市 久家代仕男

不求所得三児育て上げ

名門の図太く生きる術知らず

背のびしてメッキはがさまいとする

鮎を釣る人かげ煙る雨の宿

歩道橋の高さ涼風にとらえられ

小松市 馬 場 魚 山

戦前の生地染め替えて間に合わせ

喪服着て座る横顔見直され
横断道出来て河鹿も声を消し

ホステスに身を墮としても子の学費

米子市 八 木 千 代

カミソリが顔まで来ると対話切れ

癒えて踏む土 全身と対話する
フラッシュに似たときめきを抱く出逢い

小雨降るそのつぶやきは亡母の声

裏切ったくせに昔の歌唄う

倉敷市 藤 井 春 日

共白髪よくぞここまで辿り来し

2DKの城主ステコ白う着て

明日の希望へ一粒の砂探る貝

倉吉市 奥 谷 弘 朗

恋心鏡の中へ話しかけ

ごみまでも包んで捨てて世と変り

父の日は無事に淋しく暮れなずむ

雨が上り大山久遠の色で映え

愛媛県 渡 辺 暁 童

思うこと言いすぎ村をせまく住み

それぞれに思い出があり手ばなせず

鯛ですと鯛のさしみをのすけられ

岡山市 光 好 陽 子

ねつきの良さもほめられる年

夏祭りゆかたが女らしくさせ

ヒステリーのようにてこずる今日の雨

敷かれてる男の方へ味方をす

ゴルフ場できてふる里他人めき

岡山県 池田古心

皮肉すら言えず妬心の小さき胸

九十の母地下足袋をはなさない

仕もせぬに母口やかましくやかましく

心筋梗塞入院

病む背中妻の手娘の手温かし

桜井市 岩本雀踊子

御本家へ来た両足がしびれ出し

後つぎをせぬ学歴を子に持たせ

左遷とは知らず子供がよくはしやぎ

鹿よせに身護る鹿の目がうつろ

大阪市 西森花村

旅人をドキッとさせた標準語

タワ―やら塔やら団参忙しい

優越感座頭めいて緋の衣

赤よりも赤しカンナは夏に咲く

守口市 村田瓢太

日本列島改造どころでない天災

上げ潮の相場へへそくりまではたき

嫁った娘がチョコチョコ来ては持って去に

降っても照っても琵琶湖の水はもめるもと

今治市 越智一水

偉いなと思う女は子をほめず

力一ぱい生きているのに借りが出来

月の出へ貧しき漁村美しい

開局百年記念

開局百年ああ夏草が眼にしみる

宇部市 平田実男

総裁選昨日の友が今日の敵

沖繩の夜明けへぬぐいきれぬ雲

満四十オーバーホールがしてみたし

体より農具の月賦へ疲れ切り

大阪市 宮尾あいき

洗濯と云う手もあり女涼を取る

活けられてあじさいしよんぼり雨を聞く

お隣の朝顔私が見る

朝顔の咲かない朝の虚脱感

新宮市 大矢十郎

炎天の仕事に慣れた子の便り

自己欺瞞宮仕えにも四季巡る

母の部屋せめて南へ設計図

ささやかな不満呼吸をととのえる

兵庫県 河原みのる

オーロラの原理聞いても解らない

取り敢ずなどと三日もくれてから
小さき虫のたべる小さきものありて

ひ孫の朗報

ボクの血が確に四代続きそな

青森市

織田可津春

献身の日々を疲れたとは書かず

風がくる予報へ向けるかざぐるま

人生のドラマの中の父の皮膚

だまっではおれない友の目に出合い

大田市

藤田軒太楼

要領の悪さ純心な人と知り

万更でない顔色に喰い下がり

本番へ無神論者も手を合わせ

本家にはない子宝を分家持ち

倉敷市

谷井扇水

本当の友情気休めなど云わず

握手しに來た魂胆が判りかけ

仲間にも気兼ねしている娘の背丈け

応援歌突撃ラッパと渡り合い

松江市

吉岡通児

大臣を辞退してまで義理をたて

人の性みな善として世に遅れ

トイレまで寿し屋は酢の香ただよわせ

道問えばわたしも旅人ですという

大阪市

河野君子

観光用の説法僧侶の如才なし

三食昼寝をやってみたら雨つづき

梅雨明けを待って灼熱の陽を怖れ

上膳据膳こんな夢見て旅プラン

東大阪市

竹中綾女

くちなしの香に誘われて遠廻り

竹のびるように逢う度び孫は延び

ゲリラ梅雨日本列島踏み荒す

火事よりはましと水害はげまされ

東大阪市

斉藤三十四

朝顔を孫の日記が大きくし

マスコミは次のブーム考える

七月の電車娘へ眼をみはり

兜虫孫の日記が育ててる

八尾市

飯田悦郎

理解して俄にはずむ喋りよう

本心は善なり偽装の顔つくる

準備した消化器具まで焼けていた

環境の過密に光化学のパンチ喰う

西宮市

島居百酒

緑十字掲げて自然が破壊され

飛行機の欠航素直に引き下が
鈍感な割に勘定だけは冴え

恋愛をそろばんづくでけりをつけ

富田林市

板尾岳人

倅せの渦に巻かれて見えぬ色

そんな欲捨ててしまえと山は雨

捨てて来た山で倅せ持ち帰り

欲捨ててそれから好きになった山

倉敷市

松下梁水

開店の列へ凡夫の貌となり

薬にはなっただろうと父の愛

農を継ぐ理想を稀少価値にされ

道化師の仮面を脱げば泣いていた

東大阪市

宮西弥生

夜の雨恋に濡れゆく傘もあり

逢わぬ日を三分電話で繋ぎとめ

疑問符のままで逢いに行くも女

階段へまだバネ効く身を確かめる

大阪市

西川誓二

湯の街の雨を彩る宿の傘

煩悶を断てと午前二時が鳴る

いっとなく日日薬で消えた疵

振り返える仕ぐさをさせた衣裳負け

岸和田市 葛城伊三郎
人界へ来ては山伏蛸を喰い

猛犬に注意囁めば何んとする

長のつく役なら何んでも受けて来る

天災にまで大臣が引き出され

鳥取県

谷無閑

水温む影をうつして洗う髪

招待の皮肉敷居の高い家

故郷の雨の被害を聞く酒場

小使の趣味を社長の教えられ

広島県

高橋鬼焼

花の愚痴つんであげよう花鋏

風の私語ビルの高さへ負けていず

補聴器へ聞かせたくない娘のうわさ

地下街へ勤めて雨をまだしらず

笠岡市

松本忠三

現実にと生きるすれば打算的

生活が人と車の中を抜け

氏名札つけば毅然とした態度

真実を質せばプライバシーです

呉市

槇田英詩

諺を引用名士は祝辞とす

三枚目仮面を脱いだ日の空虚

雄芯に囲まれて女の髪匂う

呼び出しへ身繕いしてる影が見え

岡山県 出原敬一

見限った日から化粧もせず通り

向日葵が戸惑うビルが前に建ち

この話逃せば来年二十八

没落の家より庭が名を支え

大阪市 黒田真砂

句友逝く知らせ紫陽花の彩も褪せ

ピンクレディ過去振り向かず甘さなり

家紋胸に女過去から逃げ出せず

心の扉閉ざせば相手の冷い目

鳥取県 森田布堂

豪雨の悲報伝えたあとはジャズが鳴り

現場検証月の位置まで確かめる

愛嬌と若さあげ底まで買わせ

順法斗争思い出悪い旅となり

島根県 中島英子

PCE蛭もこわいものにされ

毒舌の投票ステッキにつきそわれ

現代のモラル信号に支配され

水替えて金魚も飾る夏祭り

笠岡市 木山遠二

梅雨の街舟が通てるカメラルボ

乱射事件犯人の顔子どもばく

癌でさえなければ元気出すつもり

岡山県 浜野奇童

道具とは別に秘決を買わされる

人形のように日本はあやつられ

国道がモンペの型で補修され

唐津市 新岡回天子

うい孫の散らした中へ座る客

外出のおみやげみんな孫のもの

降りることやっぱり知ってる梯子だん

大阪市 今西章雅

損得を打算し恩を売って置き

平凡な一生みくじに嘘つかれ

別居する息子へたわしまで揃え

愛媛県 村上旭童

漫画ばかり見てるこの子に夢を持ち

この僕が話すと三分間ながし

雑草の繁った田ん圃寡婦という

東大阪市 竹中肖二

中之島今朝も絵を書く人が居る

囑託として通勤をする遊歩道

目がゆけば女は足を組みなおす

鳥取県

渡 辺 乱坊改メ 苦 句

病み臥してから夫婦の空間を埋め
青い酒飲む恍惚の笑顔して
バカの眼を持つ野次馬となり視てる

諫早市

原 田 明 春

霊柩車さすが火葬場まで直行

老眼鏡ポルノ愛読して達者

用意せぬ祝辞にしては良くしゃべり

大阪市

飛 田 好 一

たれこめた雲程夕立降りもせず

慇懃な言葉の裏に秘めた棘

断酒して

飲める酒飲まぬ苦勞も花の下

札幌市

平 野 青 夜

濡れ衣を干す暇も無く時計見る

特売で買って自慢の数が殖え

★

北 川 春 果

マタニティドレス産休近づけり

自動車のために参道舗装され

はじめから笛吹く役で天下り

世話好きが一番前の席に座し

卒業へロマン스ひとつふたつ持ち

西 尾 栞

床の間の置物めきて母米寿
胸にバラ米寿の母は素直なり
めでたさは米寿の母が飲んで献し
米寿から白寿に挑む母の腰
せんば言葉で母は米寿の謝辞を言う

菊 沢 小 松 園

抱きしめたとこまで見られたしのび逢い

老春ときめて儚ない文字を撰り

思慕はのか気附かず膝へ来てくれる

旅三日ころは家を離れてず

戯談で触れて女の目と出会い

川 村 好 郎

脳軟化預金帳は手離さず

捨てられたのに煙草まだ燃えて

自己批判星に周期のある限り

音吐朗々葬儀屋のご挨拶

大声で叱ったママも眠ってず

若 本 多 久 志

草 参 (一句)

無縁墓やがてわが家の墓も又

漢薬の匂いおならに出て寂し

言わでものことと寂しく口つむる

気にしない気にしない老いの坂

恍惚の人とは寂しわが行く手

川傍柳 初篇研究

(百十)

前田喜代人 川端柳風
 故
 岡崎重義 高須啞三味
 清博美丸 十府
 藤井和雄 岡田甫

655 呉服店紺屋を見る前で叱り

一 甫

岡崎「着物がおくれたのは、紺屋の染めがおくれたためである」を言訳がわりに、当の客のいる前で、納めに来た染物屋を、呉服店の主人か番頭が叱っているのである。

とかく紺屋のあさって言葉という程、染物屋は仕事がおくれることになっており、

むだ足一日おきに紺屋させ 一四・19

おとといも来たと染物そつくなり

安五義 3

あさって迄に染まらぬと番所だぞ二〇・18
 というぐあいだった。

清「呉服店と紺屋のとり合わせが面白い。

高須「催促に来た客への言いわけに、紺屋を呼びつけて叱っている景で、半分はお芝居であり、半分は実際であると見たい。

丸「納めに来たか呼びつけられたのかは問

う必要あるまい。ともかく、字句通りの情景。ありそうなこと。

岡田「賛。

656 御袋のかたとむすこもむやつさ

一 甫

岡崎「これも母親にとり入っているどら息子。へそくりをせしめる魂胆あつてのことだろう。

母さあやなすこと神の如くなり 一一・34

で前出の「女郎買のこっちゃうだのに母あの子」ということになるのだろう。

前田「賛。「〇〇するやつさ」の表現句は多いが、この句、平凡ながら活きているし

「肩など」の「など」がよくきいている。藤井「つきあいをことわられて、悪友ども

の悪口ととる。子供なら母親の肩をもんで小遣せびるだろうが、息子が小遣もらいに

肩をもむわけではない。親孝行者は親のいい

つけを守るから、友達つき合いは二の次となる。「母親のいいなりになる奴だ、俺達のつきあいなんか、とても……」ということころだ。

高須「「奴サ」はケイベツし言い方だから、第三者の見方をとっているので、前田説どおり「肩など」がうまい。とにかく母の気に入ることをしたいのだが、肩でもむより他に手近の孝行のしようがないので「肩などもんで」いるのだ。そしてそろそろねだる奴さということになる。結局は

お袋は拝まれて出す小紋むく 六二八

お袋はかぶって行くのまではがれ 八一八

となる。どうも困った奴サである。

丸・岡田「礎稿賛。

657 十六夜八宜しくもなひ使者だらけ

岡崎「不詳、十六夜日記のことかと思つた 卅 弓

が……。

前田〓十六日（五月）は房内禁止の日、これを犯すと三年を出すして死すといふたえられていた。悪果てきめん宜しくない（腹上死など）知らせが、あちこちとぶというわけか。

清〓十六夜は、八月十五日の翌夜ではないか。とすれば、月見で吉原に居続けのドラ息子などを連れ出すための使者がたつことになる。

十六夜は親父小言の最中なり 三八・7
という句もある。他に考えられるのは、二月十六日総餘屋敷で行なわれる盲人の琵琶会がある。

十六夜に琴三味線で騒ぐなり 一七・八
以上二つも「十六夜」を考えてみたが、いずれも自信なし。

藤井〓清氏の後説が正解。宜しくもないとは満足でない、即ち二月十六日の琵琶会に集まるもの是不具者ばかりだとのこと。

高須〓「宜しくもない使者だらけ」が難物「よくない使者」はすなわち悪い使者のことだが、それが「悪い便り」なのか「悪事の使い」なのか？ また「だらけ」は「ばかり」とは違うから「使者だけ」とはとれない。だらけとは、満ちているさま、多くある

るさま（広辞苑）だから、あっちこっちへよくない使者が立つたとなり、陰曆十六日の夜に、何かそういうことはなかったかと調べてみたが判らない。結局
大家から勅使をうける月見をし 拾一・19

ぐらゐのところではないかな？
丸〓諸説拝聴。自分も清説前半の如く十五夜の月見のあとしまつに關したものと見ているが、特に「十六夜」と云ったこと「だらけ」の場所がはつきりせず、定めかねる

岡田〓小生も丸先生のように、月見で大散財した息子の処分につき、親族会議を開くため使者を立てる……と云った句と解して来ました。末尾の「だらけ」は「ばかり」の意。あちら、こちらで月見の翌日こんなさわぎがあるというのでしょうか。

658 弁当ハ出来たに尻を撫でている
一 長

岡崎〓かがみ詰めで、大勢の弁当を作ったので腰が痛い。これから花見に出かけるというのに――。

前田〓尻を撫でているのは、弁当を作った人でなく、出かける準備をしているもの。弁当はできているのに、まだぐずぐずと尻を撫ぜたりなどして、身づくろいの仕度に手間どっているところ。「弁当は」

の「は」がうまい。

弁当が出来て簞笥を交ぜ返へし 四・8

藤井〓顔を撫ぜたりはお化粧、尻を撫ぜたりは着付け。とかく女は暇がかかるもの。

高須〓花見より芝居見物とみたい。當時の芝居見物はなかなか大がかりであったから弁当から酒、茶まで用意して行ったのだが女性には「見に行くと同時に」見せに行く「面もあったので、いつまでも頬を叩いた」、尻を撫でたりしていたのである。

芝居見の証拠は女中先に立ち 初14

で今まで弁当を作っていた女中は、もういそいそと先に立っているのである。

丸〓芝居とも花見ともきめられない。またその必要もあるまい。前田説賛。

岡田〓同。だが小生は芝居は四、花見を六と見る。なぜなら、人に見られる率は、役者の方が強いから。

★

西出一栄著「ねっくれず」 六〇〇円

西尾 栞著「水鶏笛」 六五〇円

万的・杜的共著「的」 四五〇円

「秀句鑑賞と梅志句集」 六〇〇円

若本多久志著「老いの坂」 五六〇円

（以上送料共）

「旅人」以後の

麻生路郎作品

19

三十五年十一月号

不朽洞句帖

暴力もヌマさん一人減っただけ
追悼演説ビクビクしながらやってのけ

選挙

血を売る男一票も売り

二三票売ったしあすの米代に

殺し屋もやめねばならぬ年が来る

紙幣積んで積んで殺し屋うなずかせ

殺されるぐらいのことは常に云い

代議士も腰にピストル欲しからん

南海電鉄川柳会「夜行」

ウイスキーがあるさと夜行の窓をしめ

三十五年十二月号

不朽洞句帖

時代だよ蟹と戯むるひまもなし

ボタン押す一步手前か日本に住めば

首つる手あり 泡は消ゆ

清貧というも蒸溜水の味

革新も革新として老衰す

帯封文字お尻がちよっと痒くなり

本社十一月句会「古本」

古本屋別に居眠っても居らず

老いてなお梅暦など見つけて来

古本屋の棚で陽の目も見ぬ町史

南海電鉄川柳会「検札」

確信はあるが検札低姿勢

三十六年一月号

不朽洞句帖

おじいさん もう元旦の咳をする

黙秘権の行使ではなし老夫婦

長寿長寿しなびるだけはしなびたり

恋なつて有楽町に用もなく

台どこの改善汚職の匂いがし

ネオン塔屋はさかなの骨のよう

大阪通信病院川柳会「左前」

左前になつてもスローなおらない

南海電鉄川柳会「単線」

単線は窓から柿が千切れそう

(馬 静 島 傍)

47年度二賞発表句会と

同人総会(句会は五時半から)

十月八日(日)三時開会

会場は道頓堀

自安寺

5F

(大阪市南区道頓堀・電話(213) 0330 (代表))

同人総会へご出席の方に
副理事長以上の色紙(掛けもの付)を呈します。
(会場略図P 64参照)

須坂市 高峰 柳児

岐阜市 市川 鱗魚

その余生世俗をなげいている孤独

プラカード損にはならぬ列となる

栄転のまだまだ目覚しいる身分

鴨の川ミニでのぞいている舞妓

見抜かれた心をかばう世辞丸い

仏壇屋先祖の土地をほめて行き

流転の身故郷へ牙を向け続け

ダウ相場まじめな金で恐くなり

掛引の空虚へ鳴らす指の節

東京都 池口 呑歩

詠

大洲市 米沢 曉明

プロポーズ受話器の声を勤ちがい

カッコイイから革新の貌をする

棟梁の腕を盗んで褒められる

革新の論も所詮は得手勝手
体制の中で革新仕放題

若禿げも似合う部長の椅子に着き

日当も馬鹿になるまいデモ五万

民主々義くだらぬ会が多すぎる

ヘイタイは犬死させて革新派

近

今治市 月原 宵明

今治市 長野 文庫

冷房へ女は強い腕を出し

リリーフも補欠もない小あきんど

任してもよい角栄の嘆がれ声

そろばんは知らぬふりするベレー帽

さしかける方がぬかるみ歩かされ

十ばかりすぐ集ったコレクション

待避線消えてなくなる月見草

脱線もせぬ人と居て気が疲れ

義理の堰開けたり締めたり嫁と姑

射程距離らしくホステス匂わせる

俳諧紋次郎

東野 大八

稿の合羽に下げ緒のたすき、紺も引にコジリが光る―これが清水みなとのひとかどのやくざスタイルだ。ところが木枯し紋次郎ときたら、破れ三度笠のどっかい奴につづれの合羽、口にヤキ鳥屋の竹のクシーいや爪楊子のつもりであろう。上州は新田郡とだけで出生は定かではない。文字通りの一本どつこのお寒い旅がらす。

さて、この紋次郎、テレビ、映画で大変なブームをよんだらしいが、何がこうも人の関心を呼ぶのか、実のところ私にもよくわからない。眠いのを辛抱して、二回ばかりそのテレビをみたものの、なんとということはない。ただの変哲もないやくざ講談である。ある俳誌に、この紋次郎を山頭火に見立てて論じているのに出合った。双方ともブームの御当人なのがミソであろう。山頭火が紋次郎なら、芭蕉、西行だって紋次郎科に相違ない。ニヒルで孤独で、少々悪性のすね者は、俳諧の世界では至るところでお見受けする。ではそろそろとうきび畑の枯れた葉に秋風の鳴るところ、俳諧紋次郎には似合いの雲も流れと

いうところで、今回はこれを一席。

まず、俳諧紋次郎の皮切りは伊賀の芭蕉兄哥。ご承知の如く、こと芭蕉に関するあらゆる著作の類は、マスではかり車に積むほどある。この中で最もユニークな芭蕉観を世に提示したのが芥川竜之介だ一人。彼いわく「芭蕉とは前代未聞のおそろべき糞自棄の詩人」で「日本の生んだ三百年前の大山師」とある。私みたいなへそ曲りは、多年この「一発」に今もってシビレ通しである。評論の魅惑とは、当らずとも壮快にぶつとばす「断定的言説」にある。この快感はオリジナルである。水しぶきをあげるほどのものになる。

芥川の芭蕉観は要約すれば次の通り。

芭蕉は俳諧を生涯の道の草と観しながら、それに生涯を托した。俗流への軽蔑、知己への感激、芸術は舶来もの（中国詩万々）をかくしても通ぶらない。そのかわり芸術の奥儀を極めず、したり顔の連中にはすぐくハラをたてず。その癖世渡りに長じ、門弟二千人で東西で操縦し、その無情観はレーニンなみで

感傷が大嫌い。ところで、私が芥川方式の芭蕉観に感銘しながら紋次郎流にあらためて感得するのは、おくの細道の旅すがらの市振の宿的一幕だ。

芭蕉はこの旅宿で、伊勢詣りに新潟から出てきた遊女二人と落ち合ったが、翌朝出立のみぎり、遊女ふたりは、これから先の道中への不安のあまり、男性の芭蕉に同行を哀願する。しかし二女も断られて

「では、見え隠れでもよいから……」

と手を合せて頼むのだが、彼はアッサリ断りさつさとお先に失礼、行くほどのう一句

― 一家に遊女もねたり萩の月

この非情さはプロの旅がらすの常道で、かわりなければ手を出すな紋次郎型だ。

「人生の半端もの」とは、やくざ路線の十八番のセリフだが、非情、やせ我慢のエゴイズム―辺倒の寄宿渡世人の行乞には、しよせん人間の「悪性」に徹しなければ、道は歩けず、飯も食えまい。山頭火が行乞の「増収」に酒を購って食らう例は、その「悪性」による。自然回帰の風狂の旅は、この悪性が背骨である。自分と自分の闘いの思念の解決策は、この悪性の「悪」がささえていて、人の中で人を見ず、わが身をみつめる態のこの非市民性が「風情終に菰（こも）をかぶらんとは」の蕉翁のつぶやきにかえるのである。

一介の武辺であった西行も、乱世のマイホームに自信が持てず、今様の蒸発の旅を志した。僧形行乞の旅の果てに、彼は権力につかず離れずして生きていた。人間西行の心に果

食う「悪」が生活の知恵を帯びたわけだ。彼に較べると、紀貫之などはその悪がもっと徹底している。低吏の身で宮廷で幅を利かせる道は、歌道よりないと開悟したとき、貫之はこの道に生涯を賭けた。彼のエキスは漢詩の俳諧である。そして古今集の実力者となり、直撰集は彼の自選歌集といってもよい。この自己PRは、本来の彼が持つ「悪性」に他ならない。水と風の詩人とうたわれ撞球でいうツークッション、スリクッションの心の曲折方式が、彼をして独往のものにしたのである。抒情方式のこの貫之風は今も川柳でもたけなわである。乱世でなくて彼はよかった。旅に出なくても心の放浪はいつでも出来るとう会得したのが彼である。在原業平もそうだし、大伴家持だって同様だ。前者は、十二単衣の中の女体に虚無を見出し、後者は露悪の風刺性に生きた。三度笠だけが「人間」の旅ではない。仏性の善根では真の「文学」も描けない。

旅人芭蕉は、草廬の新弟子許六のとほけ人生に心を許したと思うと、弟分の直弟子其角の美酒を戒め一枚起誓をとったりしている。漫性胃病の彼には、他人の一升酒が脅怖的だったらしい。また乞食から拾い上げた路通に背かれても死ぬまで気がかりで、去来に面倒をみてやれといひ遺している。こういうところに風羅念仏乞食となった惟然が打ち込むことになる。どうもこういう測近の弟子たちをみてみると、どこか渡世人の仁義みたようなものを感じるのである。

話は飛躍するが、名古屋市の東海テレビ営業局長だった藤堂某はさきごろ物故したが、この人の先祖は伊勢津藩主だった藤堂家である。社内では「お殿様」のニックネームがあった。この人が在世のころ

「芭蕉は貴方の藩士だったが、彼は主筋のゲイボーイじゃったとみる。男色故に彼は、天下無敵の芭蕉に大出世した」とバカ話をしたところ、彼は「エライことを知っているね」と大真面目で身をのり出したことである。彼は作らざる俳人で、蕉門研究では一派を氣負う学識派だった。それだけにこちらも冗談でなくなつた。

松尾与左衛門次男童名金作、元服して甚七郎のち忠左衛門宗房。寛文二年十九歳で、伊勢津藩主藤堂家の家老、伊賀上野城代藤堂新七郎良精の嫡子主計良忠の小姓となった。良忠は松永貞室、北村季吟の門人で蟬吟と号した。ところが寛文六年四月良忠が急死した。彼は痛惜して殉死しようとしたが国禁であつたため死ぬず、遺髪をその六月高野山報恩院に収めて下山し、一カ月後の宿直の夜、隣家の城孫太夫の門に「雲とへだつ友にや雁の生別れ」の句を残し、行方をくらました。歳二十三歳。

彼の出奔は今もって謎である。いかに蕉門の諸巻山なすといえども、これを説明したものに未だお眼にかかってはいない。主従といつてもたかが五年足らず、俳諧の手すさびを主からうけたといつても十四歳のころである。彼が殉死までしかけた相手だし、死後三

カ月出奔とはあまりにも一途で思い切りがよすぎる。後年彼が四十七歳の折の幻住庵記に、この間のことを病気のせいにしているが、全国をマタにかけたツーリスト芭蕉のスタミナを想えば、病氣といつてもまるで通じない。

ところも同じ伊賀の荒木又右衛門は鍵屋の辻の武勇伝の発端は、渡辺数馬と河合又五郎のホモ仲間と殿様とのこれから起きた。生涯妻帯せず、遊女の頼みもどく吹く風の芭蕉には女体とセックス意欲はまるでない。だが蕪村にくらべてひどく肉感的な彼の作品の色けは、一体どこからはい上つてきたのであるうか。芥川流のこれは私流の「断定言説」だが、芭蕉の細道はホモにはじまるというに憚らない。ウソかマコトか、こればかりはご当人に訊かねばならぬが、この放浪の動機までつまびらかでないのも紋次郎に似ている

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452-14
夜間 06 4400 八

ブレーキ

戸田古方

自由というとすぐ責任を当り前のことのよう押し付ける人がありますが、私、それには賛成いたしかけます。責任とはつまり自由にブレーキをかけることでありまして、成るほどと納得して踏んでこそ、誤りを犯す一歩手前で止まることが出来るものなのです。

柳人古方が俳句の座で一番抵抗を感じるの
は手枷、足枷のような俳句の枠です。十七
字、季題、切れ字、少くともこれらを意識し
なければ俳句とはいえないと、俳句入門書の
著者は口を揃えて申されます。素裸で跳込ん
でいける川柳と大分違います。

俳句では、牡丹を「ばウタン」、雛を「ひ
イナ」、螢を「ほオたる」と、一句の内字数
が足りないとき、こんなことまで字数を埋め
ようとしています。暖簾「のうれん」、問屋
を「とイヤ」、宵宮を「よミヤ」というてい
るのは関西弁、大阪で生れ育った私、子供の
ころから聞かれたコトバで、その柔かさが長
所となつて利いていますので、「ばウたん」
「ひイナ」「ほウたる」が詩性を助けていな



いといませんが、どんなに詩的であつたとして、俳句に縁のないものが耳だけで聞いてわかるかしらと案ぜられます。

柳人古方は、思つたままに、

「折れてみなはれ起伏が嬉しうなりまっせ」

という二十字の句や

「星をみてたら足もとでジャブンと音がした」と二十二字の句を作ったりしました。だが、私はこれを字余りとも、破調とも感じていないのです。チャップリンは六字ですが、「チャッ」と「プ」と「リン」で三音、同様前の句で、「折れて」と「伏」を一音に数え、後の句で、「星を」、「足」、「ジャブン」を一音とみたら、十七字音は少しも乱れてはいないのです。

柳人古方は入門のはじめ十七字音について路郎師から喧ましくいわれましたので、今日もその枠を不知不知のうちに守っているのです。

運座で「浮草」という兼題に取組んだ時のこと。「水盤」と、結ばうとして、念のため

に歳事記を見たら、「水盤」は夏の季題、法度の一つ季重りになります。池で「泳」いでみようとしたら「泳ぐ」が又夏の季題、いずれも考え直さねばならなくなるのです。しかし、こういう風に虐め抜かれることによってより研ぎ上げて行かれるのかもしれないと思えもしています。

「落ち椿鼻すり寄せている仔鹿」は六月号の「探柳への出発」で引用したのですが、俳友は「春ぬくし」と「落ち椿」を代えたらと助言してくれました。「春ぬくし」も「落椿」も同じく春の季題ですからいいようなものの、よく季題を変えたらどうですかと、夏の句が春になったり、秋になったりすることがあります。花鳥諷詠といい、自然写生を生命としながら似ても似つかぬ季題と取合されたりしたのでは、これで浮ばれるのかなとも思われるのです。

それから切字ですが、短い詩の中でいくつかの道具立てを並べなければなりませんので、切れ字の形でそこに区切りを付けることは大事なことです。川柳では「かな」とか「や」を付けることは稀ですが、上五や下五に名詞をぽつんと出したり、「なり」止めなどをすると切字的役割をはたすことになりま

す。しかし、川柳がどうしても散文的になり勝ちなのに比べると、締めて痛めて、キリリとした非情に近い表現を取て求めるのが俳句

とも思えるのです。

ある句座で

“つくることを願ひ少しの苗を買う”

という句の「少しの」を「いささか」と訂正

“日影追ひ苗売り少しずつ移動”

の「移動」を「いざる」と直されたりしたの

を見て、俳句の美の片鱗に触れたような気が

しました。俳句がスマートで、川柳は泥くさ

いとも思いました。でも泥くさいのが人生の

ほんとうの姿とちがいますか。

俳句も人間探求を無視したり、忘れたりは

していません。仙人か何ぞのように霞だけ吸

うて生きていけない人間である限り人間の詩

俳句もそうするのが当り前のこと。

娘の結婚

高 鷲 亜 鈍

劫火連作

菊 沢 小 松 園

お世話になりました花嫁御寮が枕元

きれいな花嫁さんとはおべんちゃら

父に似て花嫁さんは団子鼻

酒飲みは嫌いと云いきるべきでない娘よ

婿殿は議論も酒も負けていず

唯神論婿は黙って逆らわず

口重し酒に遠慮のない婿息子

世間なみの親と云えぬにもらいに来

子の倅せに信心させていたたく

さりとて、川柳のように俳句はあらゆる人間探求の仕方が出来るかどうか、それこそ俳句留学の古方のこれから探ぐらねばならぬ問題かと思いますが、川柳よりどこかばやけたものになりはせぬかと薄々感じられるのです。その理由は、俳句で扱う人間は自分中心になることが多く、大へん主観的ともいえます。小説に私小説があるように、いわば私の俳句、純粹客観を重んずる花鳥諷詠は別として、人間の句をただよわせた俳句は全て私の俳句といつてよいのではないかと思われるのです。川柳にも私の川柳を見かけますが、こうした私川柳はあるいは俳句に近いんじゃないかと思うようになりました。

そして、人間取扱いの内容は反省であったり、懺悔であったり、又、ボヤキになったりしてもよいのではないかと思います。その点は俳句だといって変るはずはありません。ただ季節というものは、この日本の自然の中に生れたものが多いので、俳句の国際化は川柳よりむづかしいのではないかと思えることです。川柳にだってあつと驚かせる緊張の瞬間という盛り上つたものばかりあるといえないと同じように俳句には弛緩したものもあります。一語を一刀三礼で探し求めている俳人がほんとに緊張したときどんな句が生れるか、全く、他山の石以上のものを感じるかとすらあります。

団体で無理心中というかたち
キャバレーで死んで本当の齡がばれ
燃えさかる足の裏から仏なり
土を離れた人間劫火に焼け爛れ
千日デパート法善寺何っちも煙へ掌を合わし
罪の子の業火となりしか千日前
母と子を養うウエイト父も死に
焼死んでウエイトレスの齡わかり
火許みな焼けて勘定書もなし

同人吟

秀句鑑賞

——前月号から——

橘高 薫風

平安川柳社十五周年の記念の入選作品を見て感じたことは、穿ちの後退ということであつた。穿ちの敗北といつても良い。新旧に拘らず柳社には、それぞれ色や形がある。穿ちを効かした、ピントの合ったレンズといった句を伸ばすことが、わが同人の使命のような気が、最近強くするのである。

化粧壇減つて中年家具に凝り

林 瑞枝

目の飛び出る程の高級化粧品を使うのは、主婦では三十代が一番多い。五十も六十にもなつて化粧に金をかける人は、女から見ても怖いほどの美の所有者だ。大方は自分自身の限界を知つて、家具にでも金をかけることになる。女の機微を詠んで余すところがない。

水道の検針ですと長い髪

谷 垣史好

時代が移る。水道の検針も郵便配達夫も大きな帽子の下から長髪を垂らした若い人にとつて代る。はじめのうちは、そのことが奇異

に思われるのだ。

肩組んだものへ広さのわかる空

水粉 千翁

感覚の句、若々しい句。おのずから歌声が聞えてくる。

欠伸ばかりしていてツボははずさない

野田 素身郎

河野一郎という大臣がいた。欠伸どころか鼾までかいていたそうだが、質疑応答は常に正鵠を射ていた。

元の鞘汚れた足袋を履く思い

木村 弥栄子

別居していた夫婦が元の鞘におさまつた。それは、肉体的にも精神的にも不潔で我慢のならないことだといふのだ。これ以上の表現はないと思えるほど当を得ているのだが、当事者には、またしっくりしたものもあるのだろう。

六十の影がつかれてついてくる

岩本 雀踊子

切れ風の如去つた夫だが日々想う

藤村 ヌ女

われを捨てし母の齢など数えたい

小出 智子

自分の境涯を歌う作者は川柳塔には少ない。独りよがりになり易いのだが、このように人の心を打つのも真実の裏付けがあるからだ。重鈍・正朗氏の句がすだ。

つるバラで囲み身障の佳人住む

中川 晃男

松葉杖つく少年へ虹の橋

小幡 里風

身障者と美しいものとの対照。

勝馬は今の騒ぎが腑に落ちず

福井 野迷路

大穴だと人間が騒ぐ。人間の、しかも常識といったものは、人間界にだけ通用するものだ。馬の目が憐れんでいるのに誰も気付かぬくらげふわりもう停年ということか

石川 侃流洞

長い間骨身を惜しまず働いて停年になったところで、くらげのように自在に暮らせるわけのものでない。くらげを羨む。

病床で大言壮語悔しかる

西 いわを

能力のある人物が、実行力に物を云わせていた人が、病に倒れた。或るタイプの人は、物静かに配下を指図しながら、治療に専心する。また別のタイプは、切歯扼腕、大言壮語して口惜しさをかくさない。病に臥すと、その人の人間が一層むき出しに現れてくる。

大阪の暑さをがまんす儲け

遠山 可住

緑の少ない都会の暑さは譬えようがない。酸暑の七月、庶民は祭りに情熱をぶつける。商人は儲けをあげるほかはない。

異性の匂い失せてる父と腕を組む

河野 君子

久しぶりカフスを止めにより添うて

伏見 茂美

娘と父、妻と夫、これら相互の交情は暖かだ。しっかりと内容と表現がある。

近作柳樽

秀句鑑賞

— 前月号から —

若本多久志

着物の幟とり未完の恋を追う

小 谷 葉 子

女性の心理は不可解の一語に尽きる……とどこかの先生もおっしゃったが、この句も正にそれを裏書きして妖気さえ感じさせる。

落武者のように片爪だけの蟹

谷 のぶお

戦国時代、悲運の落城でちりぢりに落ちていった武者の姿を、この悲しい平家蟹に見出した人間味を高く評価したい。

味噌汁の味もきまって倦怠期

村 井 西 合

借老洞穴を誓った夫婦にも、人間である限り一度や二度は倦怠期が訪れる……その時期を「味噌汁の味がきまった頃」と表現した処に作者のキャリアがうかがえる。

この踏絵踏まねば明日へ生きられず

嘉 数 千代香

複雑多岐、しかも秒速のように変化してゆく現実の社会にねっちりと生きてゆく為には、踏絵の史実に学ぶ生き方こそ、賢明なのであらう。

逃がすまいとアベック互に手をにぎり

塩 満 敏

古川柳の現代版という着想で、ユーモラスな、そして第三者としてのジラシイもチョッピリまじえた、ほほえましい句である。

不機嫌は同じ水着に達ってから

関 美 子

男は同じ柄の洋服やネクタイの同性を見ると兄弟のような懐かしさを感じるのに、女は反感を感じて相手に憎しみを覚ええるという。その一種不可解な心理を巧に詠んでいる句。

反抗期靴まであっちこっち向き

垂 井 千寿子

第二反抗期に入ったお子さんの教育に胸を痛めておられる母親の苦悩が下八によく現れている。どうぞ恐れず、あせらず真、善、美聖、健の家庭教育を。

老夫婦ミレーのように土に生き

大 塚 豊 生

世の中がどんなに変わろうと、農民の土に親しむ生活程、神聖なものはない。

ミレーの「落穂拾い」や「晩鐘」にみる平和で幸福そうな姿、それが作者自身の心境なのであらう。

狂いなく一直線に親つばめ

宮 崎 美津子

ひたむきな親心を、つばめの巣婦りに感じられた一詠、人の子の親ならではの秀句。一直線がよく利いている。

風呂敷を鯛はみ出して宴終る

大 原 葉 香

さりげない写生句の中七に鋭い川柳味が生きている佳句。修辭上にもう一工風を。

漂えば風に逆うすべ忘れ

安 達 潮 音

詩人とはいひものだ……と感じさせる句、どんな逆境にもジイッと自己を見つめて生きながら、漂々として一句を為す。正に一茶の句風である。

美しい水彩画入り

古方手書き句集

送料共 八百円

鑑賞洩れの秀句を左記する。

老人は帰れとネオン輝きぬ

十 止 庵

強情を張れば坂道なお峻わし

福 子

寒そうな石仏もみて雨の旅

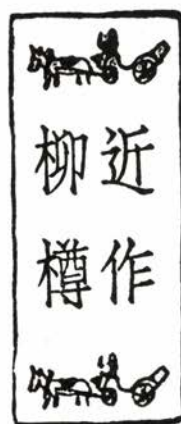
杜 月

風鈴も気だるい音で義理をたて

た だ お

知ることが権利やそんな覚えとこ

貞 祐



菊沢小松園選

岩国市 村井西合

埋み火でよしことさらに燃えずとも

こわいけどほんとのことが知りたくて

ハミングもえんりょしている低気圧

いからせた肩倅せを寄せつけず

胸の灯を消さぬあなたのペンが好き

岡山県 嘉数千代香

織姫を信ぜぬ子等の星祭り

忘れたい傷がこころの隅に生き

神様とトボトボ歩く負けている

泥まみれの汗が真珠となって落ち

雑踏に押し流されていく孤独

新宮市 川上富子

語らいを誰かに聞かれないスリル

もう何も言うまい虹がかかっている

急停車してもスリッパしない恋

見合なら破談しそんな事も言い

竹原市 脇本政己

竹の子のひたすら信じる天があり

折り鶴の数が太らない原爆忌

木の蔭でずしく亀の子は売られ

老醜のふと駆け抜けた齒のゆるみ

竹原市 三宅不朽

子には子の父には父の天守閣

病むは哀れ女人の鼓沓えている

ころろまで病んではならぬ灯を供え

人妻の夢よみがえる月見草

島根県 堀江芳子

甘えてはすまぬ心でまた縫り

この受話器たぐればお目にかかれそう

ほんわかほんわか夫と喜劇の幕があく

わたしから意地を抜いたら崩れそう

東京都 宮崎 美津子

活け花の残りですけど仏様

割り切れた時にはけっこういいお齡

新調の日傘日向を選んで往き

弱虫がいてここ一番を通せんば

尼崎市 中谷 利美

今日も又ただ働きの歩合給

考えて置くとはノーと後で知り

モニターと知って秤がびんと跳ね

夕涼み 日本に浴衣ある限り

大阪市 阪上 十止庵

としよりの閑が役立つPTA

肩書きの意識ひとこと多くなり

ビルのびよこまでこいと雲が浮く

たのもしくまたおそろしく声変り

大阪市 柳原 静香

飾り壺花の生命をまだ知らず

雷にさえ孫思い娘を思い

妻も子も病人食に馴らされる

安静をとかれた夫と死のはなし

樫原市 岩井 本蔭 棒

夏ばてを見舞えば飲みに行つて留守

順法で斗う駅のしらじらし

三日目にどやさなかったことを悔い

ひと雨は来そう風鈴落ちつけず

守口市 野呂 杜月

偽医者を惜しむ故郷皆老いて

一円玉三つ四つ受けて石仏

観光地鹿も甘える術を知り

立話ふと杜絶えさす虹が立ち

青森県 波 ただお

燃える目を受けとめるには老いすぎる

マネキンも泳ぎたいよな水着つけ

お二人の顔は祝辞で艶が増し

あそこまで言わねばよかった座がシラけ

大和郡山田 森田 カズエ

気がかりなことある朝のお灯明

くすり瓶みれば横むく孫となり

諺のとおりに覗く枕蚊帳

鼻欠けている国宝へ蟬しぐれ

島根県 谷岡 芳枝

掃除機のうなり病夫の愚痴と聞く

若さ欲し手拍子さえもおくれがち

田舎町パチンコさえもままならず

舌足らずまたも誤解がつきまとい

大阪市 小谷 葉子

一言が別れとなって瘦せてゆく

見せられぬ脚線へパンタロン

妥協なおこだわり残すあの瞳

肌合いの違いさりげなく中座

和歌山市 秋 月 宏 方

ボールペンなどはなかった目安箱
女生きる道にボルノという稼業

ちとはでな柄を着て行くめでたい日

大阪市 堀 口 欣 一

これ以上赤くはならぬ爪を染め
鐘の音が明治の森を越えてゆき
NHKテレビキッスの前で消え

竹原市 生 信 笑 子

手と手をにぎればわきいずるものがあり
蛙さえ二匹で向い合って鳴き
パラソルをくるくるあの人まだかしら

新潟県 高 野 不 二

公害のきつい東京捨て切れず
外国へ出かけてまでも恥をかき
飲みたくない日も看板を下ろさず

河内長野市 井 上 喜 酔

理由さえわかれば素直に又もどり
駅前の深夜タクシーで顔が売れ
頼りない恋虹の街廻るだけ

備前市 武 内 雅 堂

影日向なく人妻の足きれい
美しい悪魔だビルに夜がきて
仮面脱ぎ女が暗い旅に出る

守口市 岸 本 豊 平 次

年頃が居て呉服屋が四季をつけ
靴下を脱げば二十才の子の匂い
ワンマンカーどれに乗っても同じ声

鳥取市 佐 々 木 静 泉

流木も蟬も鳴かせた過去があり
おだてたりすかしたりして子をしつけ
ネクタイをゆるめ一氣に夏を飲む

竹原市 簗 田 淨 美

エンゲージリングキラキラ夢のある光
集中豪雨新居の無事を確かめる
お祝いにあなたの心を受けて嫁く

大阪市 松 本 市 郎

留守勝の家にも四季に花は咲き
病後の旅行荷物は薬先に入れ
孫と行く散歩は財布当てにされ

大阪市 藤 田 項 留 子

本社句会で全没(一句)

ラーメンのようににはゆかぬ即席句
払ったらクモ倍ほどの巣でかまえ
日本を雨串さしにしてまだやまず

新潟県 市 川 一 峯

クーラーの月賦で親爺汗をかき
ことわられ出した土産がおしくなり
飲む時はいつも万障くりあわせ

米子市 増 田 竹 馬

近眼の気楽目くばせ知らず老い
おどり食い白魚からは鬼に見え
御見合いの胸の上げ底見破れず

島根県 柵

原 秀 子

くちなしの匂いをゆらす風に合い
舌打ちのその裏側が見抜かれず
天災へ人間小さい影でいる

島根県 柵

み ど り

失意の日昼あんどんに見られたり
もて余す心を月にみつめられ
欠点を娘らしさにおき変える

島根県 東

原 福 子

さりげなく音痴に合わすパチさばき
生き残る蛭となつて草に消え
噴水に恋ができたり別れたり

島根県 安

達 潮 音

老の身を怒りに誘う記事日まし
身から出る錆と知つても筆達者
GNP数字で公害ひたかくし

大洲市 堀

内 暁 風

片棒をかついだ筈が邪魔がられ
融通きく役人賄路ほのめかし
お隣へすまぬ煙の風の向き

竹原市 楠

貞 子

酒だけはたっぷり心貧しい日

唯何となく寄り添うていたい夜
或日フトこれが倅かも知れず

東大阪市 落

合 思 月

人生を歩き疲れた顔のしわ
一人前になれば親をきたながり
苦勞した話をしないから好かれ

羽曳野市 大

峠 可 動

一片の知性波紋へ加担する
この笑顔捨てたら元の石になる
我が道に太陽ありて奈落なし

松山市 谷

の ぶ お

久しぶり行くとはいわず来いという
黄昏の出動一見美人風
どんくさいのが一人味方として残り

東大阪市 藤

田 飛 鳥

遣る瀬ない心へ今日も日記書く
情熱のかけらを閉ざす夕陽落つ
装道の心習うて京を踏む

島根県 槻

谷 一 葉

ストレスの解消派手なけんかする
散ることを知らぬ造花の冷やかさ
歳月は焼けぼっくりに火をつけず

寝屋川市 江

口 渡

いっぺんは断つてみる処世術
写真家にリベートねだる奈良の鹿

土砂くずれことと思えば又あちら

大阪市 河原林 比呂路

背のびした暮しと知らずけなるがり

鳩時計までも眠そう団地昼

セールのグラフに競う靴のへり

大阪市 小 谷 清 女

半開きすねたすがたのままで散り

そよ風に風鈴素直にゆれて鳴り

度の過ぎた意見後味悪くなり

今治市 原 田 輝 親

晴読の機会積も無く拭かれ

み仏の誓いでさえも疑うて

老妻も寝付かれぬのか向きを変え

今治市 古 野 伶 人

KKの名前が続く赤鳥居

閉会の時間気にせぬ後家の会

今治市 今 井 松 花

四捨出来る程度の不満共稼ぎ

付き添うて行って自分も買うて来る

言う人が言うてしもうて散会し

今治市 真 山 国 彦

田植せぬ百姓梅雨を持て余し

風の向き変り噴水のしかかる

飛行機は落ちるものだと続けさま

御亭主の浮気で今日も化粧せず

選ばれた誇りで拝む奥の院

焚口で都会の話たんと聞き

今治市 大 本 バ ッ ト

奥さんの方へセールス力入れ

百姓も継ぎの当った物は着ず

湯のぬるい位は無職我慢する

弘前市 小 山 内 貞 男

ふんぎりの悪い奴とは他人様

肩書がとれて見つけた人間味

すさむ世に温もり刻む花時計

釧路市 泉 き よ し

限りある道しっかりと手をとって

添う方がいるので控え目に笑う

小石まだところを得ずと信じてたい

宿毛市 山 本 窓 花

無遠慮に広げた風呂敷畳みかね

わが道も孤独足音だけひびく

責任を口程感じていない顔

岡山県 武 元 柳 子

すいすいと行方気ままな水すまし

日盛りを降りねばならぬ駅に着く

寝て一人越きても一人むし暑い

高知県 岡 田 星 雨

凍えきつたメロンへざくり刺すホーク

地下足袋の俺を邪教が買いに来る

これしきの怪我へお医者の七日分

八尾市 高 杉 千 歩

夜濯ぎの一枚二枚星へ向け

蛙鳴く闇にひそかに水ゆるる

涼み台子が寝て話白けてる

和歌山市 垂 井 千 寿 子

ビジネスと割り切り客の腕と組み

連れて来てよかった母と旅の膳

金着いただけの便りが月一度

新宮市 熊 野 溪 水

あきらめの顔で探している財布

ややこしい字はひらがなで済ましとき

マスコットだけが無傷の事故現場

尼崎市 小 林 文 月

七十六回の誕生日を迎う

誕生日まず爪を切りヒゲをそり

鳥取市 近 藤 秋 星

梅雨空と思えぬ星の美しさ

残業で儲けた分は医者が取り

鳥取市 両 川 洋 々

父の無い淋しさ父を画きなぐり

死者が出て役所も重い腰を上げ

松江市 興 富 喜 子

じわじわと貧富の差なく浸水し

湖と化した田圃に立ち無言

豊橋市 鎮 浪 翠 月

御無沙汰を暑中見舞ですましとき

夕立へ蛙あわてるふりもせず

島根県 安 達 小 茶 坊

倅な感じに満ちた共稼ぎ

適当な位置にわが妻置いて見る

今治市 薦 本 昌 道

妻の留守言いたいことを言いしぶり

元やくざ堅気としての物わかり

愛媛県 小 山 悠 泉

生き甲斐と言う朝起きの花造り

コマーシャルカレーもそばも欲しくなり

松原市 玉 置 重 人

共白髪誓ったけれど禿げてきた

好きな人出来て無口になりました

岡山県 山 田 止 水

催促をされて歯科医は又覗き

大金が転がり込んだノイローゼ

竹原市 古 江 雅 鳳

よび止めているよな砂丘ひとりゆく

愛してるとは云わないが叱らない

横浜市 増 田 豪 城

吸いがらの嵩ほど晩学はかどらず

出世せぬわけを聞かれる同窓会

池田市 石井文三郎

余念ないままごと遊びに日がおちる

草むしりうまいと褒められ使われる

東京都 大工チヨ

梅漬ける娘の手主婦の手らしうなり

餅は餅屋芋は薩摩で付いた味

茨木市 日高みつる

舞扇酒がこぼれる黒田節

結局は気持を替えて住む浮世

貝塚市 行天千代

嫁った娘へまだ柄見立てる母で有り

女とて酔いつぶれたい時もあり

和歌山市 檜村ふみよ

髪までが言うこと聞いてくれぬ朝

皿二枚買うて料理の夢ふくれ

橿原市 西本保夫

下積みに馴れて不屈の平社員

夫婦仲では平社員負けていず

氷見市 関美子

言い負けた汗はコンパクトでおさえ

商魂はひやかし歓迎致します

大阪市 新川貞裕

主権在民旅券に厳然菊の紋

耐えるだけ耐えて明治の疎まれる

泉佐野市 大工静子

蟻の集いアースふる手を知っていた

わき道をされつつとぼとぼついて来た

鳥取市 藤本佳女

うぬ惚れと見栄で自信のない男

(三男和宏の心臓手術に寄せて)

献血の一滴ずつを生きのびる

鳥取市 藤木鎮也

温泉へ行くにも美人の秘書が要り

落書のうまさ小言を忘れさせ

米子市 佐伯越子

助手席に乗ればあれこれ気をつかい

行楽を横目でせつせと鎌をふり

和歌山県 ふきあげ虎城

簡単な掟も越えてくれぬ人

レース未だ編み上らない秋の風

新宮市 城丹鶴

横網は指に包帯して休み

灰皿に話の中味盗まれる

愛媛県 渡辺都留逸

仲座するにもすぐく要領

いくさより後味悪いことしきり

羽咋市 三宅ろ亭

安閑の心を叱るペンをとる

寝屋川市 福 富 隆 子
内閣が代ったそんな縫いつづけ

大阪市 岡 本 まさひろ
無芸やのにカブトカブトと子に好かれ

鳥取県 福 田 陽 山
半年も過ぎて今年も芽が出ない

鳥取県 林 露 杖
静いの余燼ビールのほろ苦く

大阪市 平 井 露 芳
作業帽脱げば孫ある貌になり

鳥取市 大 塚 豊 生
土そだて育てて日本の農を嗣ぐ

兵庫県 高 橋 近 江
何処からか蟻が運んだ菊の虫

堺市 栗 本 藤 持
焼鳥を想いながら餌を撒き

山口県 栗 井 さちえ
出張をおもい主婦業はかどらず

青森県 岩 淵 一 星
人生の休耕真昼も寝かされる

鳥根県 岩 田 三 和
愛してるだから本気に腹が立つ

仙台市 川 村 映 輝
三日寝ただけで病人の顔になり

鳥取市 藤 本 恵 子

温泉へ都会の疲れを捨てに来る

高槻市 山 田 スミ子
玄関に一輪夏を告げている

大阪市 村 島 秀 村
公園の木陰で語るおとしより

大阪市 吉 野 志 津
おもちゃ売場うかつに過ぎてすねられる

大阪市 鈴 木 生 仏
相撲取り負けても好きな顔もあり

大阪市 松 岡 進
数珠持って仏のすきな人ばかり

大阪市 今 井 隼 人
赤軍派海外までも出勤し

大阪市 花 田 繁 子
実力者昭和太閤天下取る

大阪市 内 藤 ますゑ
かゆすする程度の恩給うらやまれ

大阪市 木 村 濁 水
加茂川の床に夜風の大文字

大阪市 須 浦 つね
悲しみの喪服に見せる女ぶり

大東市 岡 部 シゲ
胸の中までは照らさぬ岬灯台

松江市 西 田 溥 子
遺産をめぐりもうハト派はいない

川柳五十三次 (二十三)

富士野鞍馬

48 坂の下

坂の下は、関から一里半（五・九キロ）。宿の前に有名な筆捨山がそびえている。

この山で筆を捨てたが古法眼

一鉢（八〇二）

この山の本当の名は岩根山といい、全山岩石で、岩間に古松がはえ、美しい山である。昔、狩野元信（古法眼）が、あまりに風景がよいので「絵も描けず」といって、筆を捨てたというので「筆捨山」という。しかし広重の絵には、どれもこの筆捨山が描かれてある。

坂は照る日にも桑名は時雨なり

佃（二四〇二）

「坂は照るてる鈴鹿はくもる、あいの土山雨が降る」と馬士にうたわれ、人口に膾炙されている。それと桑名の名物「時雨蛤」とを

詠んでいる。

49 土山

坂の下から二里半（九・八キロ）鈴鹿峠を越えると近江の国で、土山の宿である。

鈴鹿山には鬼が住んでいたといわれ、

くもるはず鈴鹿は昔鬼が住み

藤丸（八〇三）

鈴鹿山地獄へ逃る知恵はなし

松哥（一二三）

鬼よりは草鞋喰付く鈴鹿越

千之（二四〇七）

道問えば人鬼も無し鈴鹿越

鐘重（一二二）

鈴鹿越建場できめる鬼ころし

魚交（二〇〇四）

鬼ころし吞んで休ふ田村堂

木卯（八〇二）

等の句がある。

通信 I

富士野鞍馬

一 不二田（三夫宛に）

前略——この四月以来毎月メニエール氏病続発で、殊に本月（七月）は重患、ずっと医師にかかりねています。だんだん病状が複雑になり、筋肉痛に悩まされています。

中略——六十年休まずにはたらき通した數寄せがこの病気に現われたのでありますが、如何に休養が大切であるかを痛感しました。

中略——路郎さん時代から三十年続けてきたまことにご縁の深い仕事を休ませて頂くとは残念に存じますがよろしくご諒察願います。中島先生、霞乃女史に貴台からよろしくおはなし願います。

（鞍馬先生はご病床の中から「五十三次」の完結篇までお送りくださいました。（F）

通信 II

岩本具里院

一 川柳塔社宛に

前略——「川柳と将軍と兵」特集は面白うございました。

時々あのような川柳をはなれたもの、それも面白いもの、良いものが欲しいものです。

昔、坂上田村麿が、千手観音の助力により、この鈴鹿山の悪鬼羅刹の大軍を打ち破った。という伝説は、謡曲「田村」となっており、ここに田村神社がある。それを詠んだ川柳も多く、

鈴鹿山味方の旗はもちおもり (拾三17)

鈴鹿山敵も味方も雲のうへ 巾布 (四七28)

田村丸降って湧いたる力を得 (拾五19)

矢よりも後光がまばしいと鬼神逃げ 巾布 (五五34)

雨あられ有て鈴鹿の道開け

くしめ (七九24)

鈴鹿山ひゃうだひゃうだと初手はいひ (拾五25)

(拾五25)

鈴鹿山外の観音ではいけず

(拾五18)

鈴鹿山是ぞ外道の下り坂

四目 (八五10)

千放したは鎌倉に鈴鹿山

里鶴 (三八23)

鈴鹿山五百矢先でいいところ

孤雲 (三三22)

観音の千の矢先きに五百うそ

湖来 (四二26)

観音のかけね五百の矢先也

猿松 (三二20)

鉄砲の半分はいる千手の矢

薬石 (二〇26)

などと、千手観音が、「一たびはなせば千の矢先」と謡曲にあるが、弓を射るには二本の

手が要るから五百の矢ではないかと、川柳はいつている。

「坂は照るてる鈴鹿はくもる、あいの土山雨が降る」

とうたわれるとおり、土山はよく雨が降ったので、広重も土山の絵には雨を描いてある。

土山と唐崎雨で名が高し 尚古 (八〇23)

唐崎も土山もふる名所也 青露 (六八3)

土山のあたりであられふりなくし 夢輔 (二〇一34)

土山でぬれた雨具を坂でほし 清原 (八〇23)

とその雨も詠まれている。

50 水 口

土山からは平地で、水口まで二里二十六町 (一〇・七キロ) 加藤能登守二万五千石の城下である。「名所記」に

「女房ども町中に走り出で、胸ぐらをとりへ、手とり足とりしける程に (中略) 無理に家のうちに引き込む。この宿は、三百六十日旅人にどぜう汁の旅飯をする所なり」とあり、

どじょう汁喰うと都が近くなり (鞍馬)

水口ぎせる、ふじこり、どじょう、干瓢などが名物であった。広重の絵にはその干瓢が描かれてある。

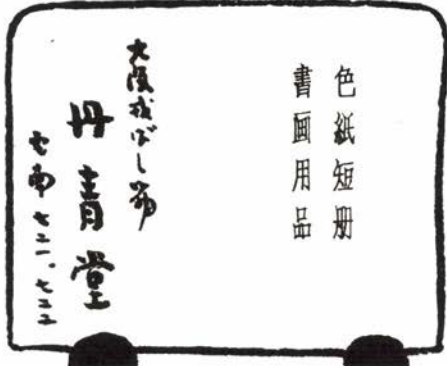
それを誰に書かせるか、これはもう編集の腕前です。

私も編集らしきものをしていきますが、誠にもってむずかしいもの。大八さんのキャラア、よくあれだけ続くもの、視野が広いのに今更ながら驚いています。

一三夫さんの一代記など、ゼニにはなりませんが、一年、二年と続く面白面白。薫風さんのやどや裏表なども興味ある題材です。

面倒だが、またやってみると、川柳の題材がいろいろ飛び出してくるでしょう。

(謝・無断掲載)



あ あ 川柳塔社物故同人

不二田 一三夫

明治文壇をむしばんだのは結核で、戦後の文壇はガンと心筋硬塞に襲われているといわれている。

そういう樋口一葉も二十五歳で、石川啄木は二十七歳、正岡子規も、

「痰一升 糸瓜の水も間にあはず」と辞世の句を残して三十六歳の若さで結核で死んだ。

ガン組には吉井勇、室生犀生、吉川英治、尾崎士郎、高見順、大下宇陀児、伊藤整、佐賀潜と、書きだせばキリがない。

心筋硬塞では子母沢寛、三角寛などがあるが、昭和三十年ごろからは六十五歳以上の作家が多いのは医学の進歩によるものであろうか。

わが川柳陣営は総体に長寿型のように、まずはメデタシ。

常任理事会などで、ときどき「次ぎは誰の番や」なんて云うが、こんなのはこんど絶対禁句にしてほしい。六十すぎたら年のことは云わぬことだ。

川柳塔社の物故同人をしのび、創刊号からひろって見たが、退会後の諸氏は割愛した。

このなかには好作家として鳴らした真鍋一瓢氏などいる。

戸倉普天（兵庫県）41年6月26日 七十八歳
川維初代理事長、郷土史の編さんなど文筆に卓越。

親しめば土にはちっともうそがなし
長野井蛙（防府市）41年7月25日 六十七歳
定年まで国鉄勤務。井の中の蛙と謙譲の人だった。

注射タコ撫でつつ癒ゆる日を信じ
松江梅里（大阪市）42年6月28日 六十歳。
大萬川柳創設者、川維、川柳塔幹部。何をしても一流の人（葉氏談）

命まで賭けた女でこれかいな
木村十悟（大阪市）42年8月21日 六十三歳
かつての川維阿倍野支部（南大阪川柳会の前身）の須崎豆秋氏の片腕として活躍。

お早ようと色街午後を起きてくる
脇田 勇（大阪市）42年11月13日 七十一歳

元大阪市教育委員長、第一回大阪市民川柳大会に尽力。（現在の文化祭川柳大会）

河相すゑむ（西宮市）43年9月19日六十四歳
川柳塔社常任理事、甲南川柳教室などの主催者、川柳古書蒐集家として有名

色即是空スプートニクが飛び
那谷光郎（加賀市）43年12月10日 七十四歳
九大出身、開業医として活躍。川維大聖寺支部の草分けとしての北国柳界の雄。

問うだけを答える医者頼りなく
工藤安亭（青森市）44年1月29日 六十五歳
満州引き揚げ後歯科医開業、歯科医師会長や県人会長など歴任。学生時代は相撲部主将

みちのくの夜冷えに荒れる居職の手
服部十九平（岡山市）44年2月25日六十七歳
元陸軍大佐、川柳塔参事、慰霊塔や遺族会館の建設など、遺族の父として有名。

老婆とじゃんけんばんで肩を揉み
関戸宗太郎（小松市）44年3月3日四十三歳
金沢大学付属病院で手術を再三うけながら最後まで川柳をすてなかつた。

店員が足りず高血圧下り
井上旭峯（玉島市）44年7月19日 七十五歳
旧富田村助役、川柳たましまの元老。

裏庭に青空がある車椅子
碑 彦彦（大阪市）44年12月3日 四十歳
碑を（いなび）と読む人が少なく、雅号ぶっちゃけばなし”ではじめて知る。

—商談の横で金魚が昼寝する

後藤梅志（大阪市）45年1月15日 七十七歳

川柳塔社参事、初代『秀句鑑賞』担当者。著書に『秀句鑑賞』と梅志句集がある。

—びきの姿 緋鯉が生き残り

藤本礎山（鳥取市）45年2月8日 五十九歳

元海軍将校。『ふじかけ短詩睡会』を主宰し、小、中学生の川柳指導に尽力。川柳一家として有名。

—利用価値まだあるらしい見舞われる

橋本緑雨（大阪市）45年4月16日 七十八歳

川柳雑誌創刊時代から故路郎先生の片腕として活躍。

—初詣り賽銭を踏み足を踏み

島野大吉（大阪市）45年8月2日 六十三歳

肝硬変で医師から見放されていたが川柳によって二、三年寿命が延びたといわれている

—蝶の舞う花園がありロータリー

清水白柳（大阪府）45年11月12日 六十五歳

川柳塔社常任理事、編集長。柳界の古豪であり川柳塔社の柱だった。

—春日遅々として仁王さん眠くなり

伊藤泉睦（大阪市）46年1月9日 四十六歳

好郎氏指導のまるべに川柳部の重鎮。後輩の指導に尽力、その人柄は温厚そのもの。

—寄り添うても傘の高さに気を使い

桜川不水（下関市）46年7月7日 七十三歳

海上生活で半生を送り、文字どおり質実剛健、酒豪不水として知る人ぞ知る。

—だいたいもふとれ河豚の子も肥れ

平尾太希志（大阪市）46年9月 五十八歳

九州の医博、杏林川柳会で活躍された。走り書符号のような字がならび

酒田清子（大阪市）46年9月5日 六十歳

西出一栄さんとは姉妹、女の豆秋といわれた人。

—情熱の枯れた時樹水のようにになりたい

宮地双楽（大阪市）46年10月29日 七十五歳

『和』の色紙一千枚揮毫などで有名。「大法輪」に川柳欄設置を建言した人。

—死ねばみな元素にかえるだけかしら

川岡雪眼子（諫早市）46年11月13日六十四歳

千里眼 雪眼子として全国的に有名、著名人にも信頼されていた。諫早文化に尽力した

—注射した血汐と知らず蚊がたかる

★

梅里さんと梅志さん

の思い出

吉田水車

梅里さんは川雑時代を経て川柳塔に毎号多くの名吟を残されたが何と言っても大万川柳

百九十五回の偉業である、謄写刷りの初期時代には私も仲間入りさせてもらったもの途中で挫折してしまったのは恥しい限りであった。大万川柳によってどれだけ啓発され、多くの柳人が生れたことか、氏の柳界に打ちこまれた情熱は又数多の経営社会に對しても同様であつたらうと確信するのである。私が名古屋在住の關係もあつて、氏と親しく相談する機会を得なかつたのは今にしてよくまてならない。アペノ近鉄ビル地下の食堂へは一度訪れたことがあり、壁面すき間なく大万川柳におおわれていたのに驚いたものである、又最近としてはあの年の二月に上阪の折三ツ寺センターのお店をたずねたが折悪しく、どんぐり句会に出席されていてお目にかかれなかつた。時間の都合上、名刺に來意を書き残して辞去した。追っかけるように町重なさいつ状がとどいた、それが今となっては遺墨となつてしまつた。

ひたすら氏の御霊の安らかにいままんことを念じ、謹んで追悼のことばといたす次第である。

このたびはすずしき句座や梅里仏 水車

★ 尊敬込めて梅志さんと呼ばせていただく。

梅志さんとは、ついに相見えることなしに終わった、しかし作品を通してわれわれは常に対面以上の親しきをもつていたのである。

梅志さんから前年いただいた賀状には「喜寿の春」とある通りますます米寿へお健やかならんことを希をうたいたいところ、二十六日に

計報に接した、にわかに信じかねたが本誌によって悲しい事実となった、黙してただご冥福をお祈りするのみであった。

梅志さんは路郎門の高足として数多の作品をものされ、今その珠玉的お作集を拝誦するにおよんで教え導かれることの多いのを感謝申す次第である、とくに秀句鑑賞篇を主とされている点に梅志さんの作家としての見識と川柳愛に深い敬意を表したい、開病の裡に在られて刻明な鑑賞文をものされたのは、このために或はご病状にさしさわりとなったのではあるまいかと、今にしておそれながら推察もいたすのである。

梅志句集を正す浄机に春浅し

水車 合掌

▼時の川柳誌上句会（第一回募集分は九月末日締切。第二回、第三回は次号発表）

「火花」

「抜く」

「坂」

「耳」

「雑詠」

・各題三句、必ず別紙のこと。投句用紙一題ずつ記名のこと。

・投句料、各回百円（切手も可）

・賞品——総合得点十位までに楯ならびに東洋樹主幹の短冊を贈呈。

・宛先には必ず「誌上句会係」と表記のこと。

〒六五二 神戸市兵庫区神田町四〇

時の川柳誌上句会係

色紙・短冊が相伴して

——半月氏の死

八木 摩天郎

古聖の言葉に、「一樹の蔭一河の流れも他生の縁」と、まして同じ川柳の枝に連なる縁は土地の遠近を問わずなつかしいものである。知らぬ土地で未知の川柳家から話しかけられたり、夜の更くぬ知らぬ程に旧知の友のように心をゆるし合って話込めるのも柳友ならではの。惜しき別れに、乞わる儘に幾度びか、色紙、短冊に揮毫もした。来訪を受けて幾度びか筆もととり、或は8ミリで撮影されて遠く海外で映写された事も二、三回あった。今までに色紙や、短冊の事に就いて別と思った事も考えた事も無かったけれど、最近故人となった知人半月氏の事を思うと涙が流れる。思えば半月氏と私のつながりは、十年程前に遡る。川柳句会に半月氏が会場へ来られた。中風症で、病床に長らく居るのだが川柳が好きで好きで一度来たいので自動車で来たとの事、人枝へとなって二、三人が身体をささえて会場に、どっかと坐られた。文字も左手で上手に書かれ、僕の柳話にも静かに聞いて呉れた。爾来、公民館にも数度、花梢君の句会にも見えた。永く教鞭を執って居られて学校の校長先生であり、教育委員もせられひたすら川柳を愛し、川柳に生きるのだと話には頭が下る思いであった。

柳舌

月刊「噂」の責任編集者である梶山季之氏は、川端康成氏の自殺に関連した記事のなかでもしういことを云っている。文士には、活火山、休火山死火山の三つがある、と。なるほど、こ

いわれると川柳にも通じるようである。活火山は毎号作句している人、休火山はたまに句会へ出る程度、死火山となると、もういけない。柳誌すら購読中止、すでに川柳を忘れてしまった人である。（不）

花梢さんを通じての色紙、短冊の揮毫で、公民館で揮毫を渡した事があった。嬉んで長く病床に揭げて、見て呉れて居ると云う話は美代さんからも度々聞かされた。

数年前四月の島根県木次のむらくも川柳会の観桜川柳大会の途次、桜の川堤で、半月氏が死んでその遺言で、私の短冊を棺に納めて呉れとの話。

旅をおえての富柳会が四月下旬、公民館で開かれた際、半月氏のご長男の奥様が、父に替ってと挨拶に来られた。色紙、短冊を父の遺言通り納棺したとの有様を再び聞かされて子供の死に母は愛してた兄の玩具を棺に入れた心境を思い出して、旅先での花梢、美代両氏の話もしっかりと同じの事も聞かされて、半月氏の教育者としてのお人柄に、頭の下がる思いをした。色紙、短冊が葬送に役立つとは、私の如き、私の色紙が、野送りしようとは……、ああ涙が頬につたわってこれ以上書けない。

ああ

若本あき坊氏逝く

ホノルル

林 明 春

ハワイウイロー社の、あき坊若本儀一氏は去る七月二十七日突然逝去されました。

最近はずこし弱り気味で、中島生々庵先生ご来布の時も欠席されましたが、先般お見舞いに病院へうかがった時はお元気そうで、それから二日後には退院されたのに、それから一週間たつたためうち八十二歳のご高齢で亡くなりました。

生前は精いっぱい世のため、人のため働いてこられたので故人にはなんの悔いところもないでしょう。最後に手を握りしめた時に私はそう確信いたしました。

ご遺族の方々のご慰傷は察するにあまりありませんものの、故人は安心立命の境地で浄土へ旅立たれたことと存じます。

(若本多久志本社副理事長とは「いとこ」にあたる方でした)

若本あき坊句抄

妻の知恵笑顔で何かねだる腹

鍍金でも父の形見の腕時計

負けて勝つという手もあって痴話喧嘩

引退はしたが周囲が休ませず

花嫁の真心一家に灯がともし

色眼鏡かけて酔眼ごまかす氣

重役になって始めてクラブ振り

パイオニア変る世相に腹が立ち

旧友も社長となって疎遠なり

短気な男自分の墓も建て

人の世話無駄でなかった今日の幸

★

川柳塔社同人

あき坊氏逝去

ホノルル

市岡 曉 舟

クアキニ病院の時計が午前一時を告げたと
き、若本あき坊氏が幽明境を異にされた時刻
でした。

細井葬儀所で、カネオへ東本願寺と、カネ
オヘアロハ年長者クラブ共同主催でいとも盛
大にご葬儀が行われました。

若本あき坊さんの属しておられた各方面の
団体が、十四、五もありまして、その参列者
が実に千名を越える多人数でした。
あき坊さんがいかにご生前多方面で活躍さ
れていたかがうかがえるものでした。
ホノルルウイロー社を代表しまして、私が
ご焼香申しあげました。築山快夢起、磯島三
石、田中万里歩ご夫妻もご遺影にひざまずき
ひたすらご冥福を祈りました。

——合 掌

★

川柳ウイロー社(ハワイ)林 蒼蛇樓報

夕涼み母の若さよ夏羽織 河 舟
身も心も裸になって夏の海 万里歩
浮草の流れで咲いて生きる智慧 峯 円
ジリジリと夏の暑さにマング熟れ カロ女
灯籠を流すならわし子に教え 三 石
嫁ぐ日に母は涙を目に浮かべ 明 女
夏やせと言うが悩みは他らしい 蒼蛇樓
公休へ一家揃って夏の海 曉 舟
かえり見る七十年の浮き沈み 公 女
浮き沈み古橋を迎えた顔のしわ 十 吉
夏休み又心配が一つふえ 拝 山
浮ぶ瀬もあらうと度胸すえて待つ エス子
汗の香がしみじみ夏を思わせる 椰子郎
ドン底で浮ぶ瀬があり立ち直る 快夢起
窓あけて逃がす残暑へ扇風機 雪 女
浮きうきとあの娘この母盆踊り 紅 溪

涼線追って高野山と金剛山頂二つの句会

島根柳人と高野山へ

河内 天笑



(写真は島根柳人を囲んで)

毎年路郎忌には必ずご出席される堀江正朗氏をはじめ今年も島根柳人が大挙して来阪された。去年の路郎忌に堺見物をされた折「来年はここで徹夜句会をやるう」と、約束されて一年、路郎忌の前日、堺・若芽と木次・松江の合同句会が摩天郎居にて盛大に行なわれた。約束の徹夜句会にならなかったのは翌七日に高野山を訪れる為であった。

七日朝九時、南海高野線堺東駅ホームには正朗さん、明郎さんの木次組と祥月さん、通児さん、孤呂二さん、鶴久さんの松江組に儀一さんの元気なお顔も見える。ウィークデーの事とて堺からは摩天郎氏と私の二人が案内役となった。ナンバ発の急行に乗った一行はすぐ柳志さん、静馬さんを見つけて総勢十一人と賑やかになった。年に一度か二度しか会えぬ柳人同士のこと、車中あちこちで柳論会が盛んだ。アッと云う間に高野山のとっぺんへ到着。

樹齢五・六百年から千年という杉の銘木に囲まれた奥の院へ通ずる山道はさすがに高野山である。涼しいからゆっくり歩くことにしてここからは本職の案内役をお願いした。先ず水掛不動さんに霊水をかけ「御廟橋」を渡る前に一同奥の院に向って一札するとこれから「詣らせていただく」気持ちになり身も心も引き締る。奥の院の裏山にある弘法大師の、大師御廟の前で一行の最高齢者摩天郎氏の名が告げられ家内安全・交通安全の祈とうを受

け一同は「南無大師遍照金剛」を三唱。約一時間にわたる案内で遠来諸兄も満足そう。地上の雑事をしばし忘れてのこの雄大な杉木立の散策は高野山ならではの事である。

ここでの思い出のひとつ。どんな難病にもご利用があらたかと云われる薬師如来像の目をさすってその指で正朗さんの目をさすって差しあげると「天笑さんありがとう。僕は芳子のことを祈ってたんですよ」と云われ思わずほろりとさせられた。この夫婦に幸せあれと念じずには居れなかった。

ここから一行は、昼食の用意をお願いした「遍照光院」へ歩く。前日西いわをさんのお取りつぎで急廻精進料理をお願いしたところ心よく引き受けて下さった。ひろびろとしたお寺独特の雰囲気の中で、待望の精進料理がゆきわたる。ここで一同乾杯、空っ腹へ冷いビールがしみこんだ。今日のところは精進料理で辛抱したもの、最近高野山を訪れる団体客も多く、宿泊設備はか受入れ体勢も万全と云うことらしく、註文すれば精進料理以外でも食べられるという結構なご時世になっている。「赤こんにゃく」と云えば肉のこと、「白茄子」と云えば玉子のことで「釘」とは、だし雑魚のことと先日ふる里の唄まつりで土地のおバさんが教えてくれたまことにユー

モアたっぷりの別名をつけられたもんだと感心する。

霊峰高野山に別れを告げて一行はそのま路郎忌句会々場「以和貴荘」へ向う。車中席題「精進料理」で摩天郎氏の厳選を披露しよう。

新発意のつもりで食べた普茶料理 静馬

精進料理に三千尺の住み心地 通児

精進料理病人向きやなと思ひ 儀一

歯ごたえのないカマボコを駄と知らず 柳志

精進料理だけではお寺儲からず 天笑

精進料理母はよろこび孫不服 摩天郎

こうして高野山詣りは無事にたのしい幕となりましたが、堺出発から以和貴荘到着まで正朗さんの手をとって居られた、明嗣さん、通児さんのご親切は実に美わしく素晴らしいこの道行を一層印象深いものにしてくれました。

静馬さん、柳志さん、儀一さん、ご同行有難うございました。

金剛山二百回 登拝記念句会

板尾 岳人

ばくの金剛山二百回登拝記念句会を菜の花の皆様が開いてくださった。(八月六日)

会場は海拔一一二五米の金剛山頂香桶荘である。菜の花の有志から記念楯、木次の正朗芳子ご夫妻から祝電、松江の祥月、通児、狐

呂二、鶴丸各氏からも記念楯、富柳会の柳太氏はじめお祝いをたまわり、生涯忘れ得ぬ感激にむせんのである。

榮先生が当日は富田林駅へ一番乗り、一行三十数氏が続々参集、金剛バスに全員乗り込み、河内十人斬りで有名な水分を左に見て終点に着いたのは午前十時十分だった。そこは全山天然冷房の涼しさだ。どこかでうぐいすが鳴いた。

「テープですか」とは酔々夫人。どうしてどうして正真正銘の生まの声ですよ。

ロープウェイからの下界の眺めは雄大そのもの、約六分間は空中游泳である。

金剛の水をほめてのど仏 雀踊子

香桶荘の玄関に菜の花句会一行様と書かれ、会場は六十畳敷の大広間である。この山頂に大浴場もありムードは最高。

ばくの山のグルーブアララギ会の一

一分間の柳論

川柳会に参加して多くの句が選ばれることは、その作品が秀れていたので甚だ名譽と云ねばならぬが、併し一句も入選しないのは凡作駄作を提出した不名誉なこととは云えない。例えば入選はみんな白い服を着ている中で赤い服を着ている場合、ノッポとかデブとかが注目されるのと同然でもある。

大体大会での選句は数に制限があるために佳句でも入選せぬことのあるのは大学入

が着き、会場はますます盛り上がる。出席記録保持者の静馬氏のため席題が追加されるなど盛り沢山。

孫の手を引いて山へ来るつもり 岳人
さすがに山の句、山男の句がユーモラスに表現され、アララギ会の山男たちも耳をすませて披露に聞き入っていた。カップは吉岡美房氏、これで三カ月連続富田林軍に輝く。

二百回こともあるうに金剛山 小松園

★

飯田悦郎

この日の秀句は左のとおり。

眺められてる指のダイヤへとるポーズ 綾女

登山靴山には嘘が生まれない 雀踊子

山にもう妬かない妻でいてくれる 美代

成就せぬ恋美しい詩を作り 百酒

あのころとおんなじあつい夏が来た 摩天郎

雲行きへ釣竿を握るひとり言 花梢

長野文庫

試と同じく、年度によって最低点が違ふのと偶然各題共次点と云う不運の場合もある。思うに川柳句会には川柳文学の講座を受講するようなのでも、出席して、句会の運営ぶり、講師の披露ぶり、柳人の作句ぶり、柳人との交わり、その他何々を学ぶことで、入選句は引例の句と解したい。自分の句は一句も読まれなく共、大会で学ぶことは甚だ多く収穫は充分にあることを知っておき度い。

過 密

遠山 可住 選

過密都市上に上にと家が伸び
押入れに子供が寝て居る二DK
墓地過密無縁仏は転がされ
過密ダイヤレールの悲鳴聞えそ
地下街へにげても過密追ってくる
村まつり一日だけの過密にし
江戸っ子が過密の街でひそと生き
後手ばかり打って過密の上下水
過密都市の裏で小学児童過疎
結局は過密に負けた荷をまとめ
新幹線つけて過密へ拍車かけ
しまいまで立たせ国鉄赤字なり
満員車にゆられ満員の海に行き
内科また過密の土地へ増築し
地下街の過密へやっとメスを入れ
通勤の過密に耐える古かばん
過密都市季節の花を知らず過ぎ
籤買うて過密を抜ける策を練り
御美人と肩くっつけて行く過密
肉親が過密の中に居てあわて
過密地の松のまじりも造花めき
百万ドルの値がついた過密の灯
プレハブに入れな過密の子があ

過密都市それでも鬼門だけは除け
アニメのお話合せの過密都市
進学へ過密に挑む子の粘り
停年は近し過密都市捨て切れず
甲虫売れる過密を哀れとも
日照権叫んでビルの谷に住み
過密化の渦が大きくなうなり
結局は妥協で生きてゆく過密
過密禍を知ってそこに住みた
過密からこぼされぬ様しがみつ
善人が過密の死角にヒソと住
蜜蜂の花の過密へ身を休め
箱庭に救い求めはど詰り
事故起きた後で過密のせいにす
戎橋過密の中に居る孤独
けだもののように過密の中で生
離島して過密の中でめぐり合
ずらりとデイトも過密駅出口
過密の中に虹があるように見え

住

深呼吸したくて過密の街を出る
遠慮しいしい過密へ双子産み
過密の熱気夕立が冷やしにき
過密のド真ん中にある平屋
よく熟れた柘榴にも似て過密都市

人

過密にも慣れて漬物石を買い
人の命を過密そ知らぬ顔で居る
天

自分だけ過密の外に置いた愚痴

不酔
国彦
綾女
季贊
宵明
古心
七面山
弘朗
輝親
杜月
肖二
秀翁
輝親
国彦
宵明
信二
隆子
重人

軸

三億円過密の隅に消えたまま

10月8日(日)は

二賞発表句会と同人総会

会場 道頓堀筋 自安寺

ネクタイ

植村 客遊子 選

ネクタイをゆるめ一氣に夏を飲む
ネクタイを外して無礼講の宴
ネクタイもどきと出られぬ所に住み
趣味合わぬネクタイ貰いもてあも
蝶ネクタイを張る老セールスマン
蝶ネクタイ営業マンと云うタイ
年寄りとなつて案外似合うタイ
ネクタイを心に締めて新入社員
ネクタイの似合ぬ父の太腕
ネクタイの似合ぬ父の太腕
よんどころなく蝶ネクタイを
お悔みへネクタイだけを変え行き
ネクタイの思出あせてもよう捨
ネクタイを外しゆつくりいだく気
ネクタイを貰ってからが高うつき
父の日の父のネクタイ派手過ぎる

静泉
三十四
保夫
越句
苦句
季贊
悠人
重人
旭童
伶人
隆子
曉明
青夜

長 屋

不二田 一三夫 選

田を売ってネクタイ締める人に
黒ネクタイ今日神妙に衿に沿い
ネクタイをゆるめぬ人で肩が凝り
子沢山ネクタイばかりこつとれず
ネクタイも上衣も着るスケジュール
ネクタイを上座がゆるめて和み
ネクタイの歪み正して身構える
ネクタイを締めぬ家を継ぐ誇り
稼がねばネクタイ派手にする
ひかえめなネクタイ締めて別の顔
ネクタイを外して今日をしめく
やり込自信ノネクタイで出る
ネクタイの柄程男派手でなし
燃えそめた心ネクタイ撰ばせる
ネクタイを解いてやさしい父と
新型のネクタイ女の目で撰び
ネクタイの歪み氣にしたまま別れ

佳

曲った事きらいネクタイしめる癖
ネクタイを外せばお前と俺の仲
ネクタイを撰る倅をかみしめる
ネクタイをはめる手もか知らず
ネクタイに思ひ出妻が秘めて居り
ノータイになって落ち目を立て直し
憤懣を洩らさぬタイはきつく締め
天 地 新之助
ネクタイをゆるめて聞いて呉る友
軸 三和
ネクタイをキツチリ二日酔の朝

露地裏の人情皿に乗って来る
浮世絵を長屋暮らしに見るドラマ
その昔長屋の浪人傘を張り
夏が来てみな丸出しの長屋にし
表札は長屋にかけられるとは知
魔坑になった長屋は月ばかり
真昼にはどきつい顔で長屋出る
長屋から出て来た臍の見える服
押売りへ長屋なから背を向ける
訪れた長屋で位牌示めされる
裏長屋みんな素顔の人が住み
撮影所長屋の露路は行きどまり
無所属と思てか集中する長屋
田中だと聞いて長屋の力瘤
子を叱る声が長屋を筒抜ける
大雨のたんびテレビに出る長屋
小説のモデル長屋でそっと逝き
一升壺と湯呑み長屋の意気が合い
両隣り壁を叩いて用が足せ
しじみ売り長屋へ来てから荷
内職も一括とどく長屋角
市役所が長屋の大家つとめて
他所者を長屋の犬は見逃がさず

越 三和子
藤 持句
木 魚
松 花
同 風
千 翁
杜 月
緑 水
カズエ
不 酔
夜 代
青 仕
豪 城
洋 々
宵 明
貞 祐
春 日
新之助
隆 子
貞 男
一郎

戦災にあわぬ長屋のフィーリング
地蔵尊長屋の奥に祀られる
ふすま張り替え長屋は嫁を待ち
高架線長屋のくらし見て走り
公団は長屋の上に積み重さね
反骨をよくも揃えている長屋
手の職に長屋それぞれ自負をもち
反対へもうまとまっている長屋
鉢植えにでんでん虫が這う長屋
どちらかがなんとか稼が来る長屋
医者が来て長屋はひそと話しこみ
英詩
「長屋」の選者、水洞氏のご都合で代選
することになりました。 — 一三夫

堀江正朗選歴祝賀川柳大会(島根県)
時 昭和47年10月15日午前十時開場
場所 木次町 体育館二階和室
題と選者 杖(橋高薫風) 酔う(尼緑之助)
友情(木村三雷波) 頑固(岡崎祥月) 妻
(藤井明朗) 握手(堀江正朗) 三句宛。
投句のみの方は各題別紙、住所氏名明記
投句料二百円(切手可) 投句は10月10日ま
で。会費千円(会誌、写真代、昼食、懇親
兼、席題共秀句に選者短冊贈呈。島根県
大原郡木次町新市中 むらくも川柳会

初歩教室

— 題「耐」 —

本田 恵二 朗

過疎の家忍耐の額派手にあり

(忍耐の額が煤けて過疎に老い)

耐乏のくらしも今は笑い草

(耐乏のあの頃語り合う笑顔)

酒煙草耐えねばならぬ心音か

(禁酒禁煙に耐えろと心音に言われ)

耐だけ信じて高見山生きて来た

(耐え抜いた甲斐を見つけた高見山)

泣けるだけ泣いて耐えよと珠数をもみ

(悲しみに耐えよう珠数をもみ続け)

産声に苦痛の顔もほころびぬ

(陣痛によくぞ耐えたり呱呱の声)

貴男の耐にもう四十年

(あなたの耐に昔の価値を知り)

今日の幸耐えた昔の価値を知り

(耐え抜いた値打ちを知った今日の幸)

耐えられる代りの材料見つけだし

(耐えられる代りの材料探さねば)

忍耐の二字を男はかみしめる

(忍耐の二字を男としてなめる)

富貴子

同

同

寛

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

忍耐の限度青筋手のふるえ

(青筋とこぶしで耐えている限度)

姑と夫に耐えてその上子に耐える

(姑と夫おまけに子にも耐えて妻)

一言を耐えて内輪のなごみ増し

(一言に耐えて茶の間に波立てず)

耐えてこそこの世の道に光あり

格言調の表現になる傾向がある。それを改め

る努力があつてこそ進歩がある。精進あれ。

(耐え抜いて光みつけた生きる道)

嫁く娘へ母忍耐をくどくどと

(嫁く娘へ母耐えるのよ耐えるのよ)

耐ゆるより利口に廻る方が勝ち

(耐えるより利口に廻った奴が勝ち)

くそ意地で耐えた空しさ噛みしめる

まだ続く祝詞へ膝が耐えている

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

耐震へ遠く小さなやつを建て

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

八尾市文化祭第二回川柳大会

時 昭和四十七年十一月十二日(日)

正午開場二時開会締切一時

所 八尾市商工会議所(近鉄八尾駅ヨリ六分)

兼題 幸福・本番・竹・祈り・紫・襟・伝統

・挑戦

席題 当日 二題(兼、席題選者交渉中)

投句締切 十月二十日

投句先 八尾市清水町一ノ六

教育センター内公民館

葉書に三句 当日も受付ます

賞 八尾市長賞。議長賞。教育委員会長賞。

外に六句(副賞あり)

主催 八尾市教育委員会

共催 八尾市菜の花句会

主催 八尾市教育委員会

共催 八尾市菜の花句会

主催 八尾市教育委員会

共催 八尾市菜の花句会

主催 八尾市教育委員会

共催 八尾市菜の花句会

主催 八尾市教育委員会

共催 八尾市菜の花句会

主催 八尾市教育委員会

共催 八尾市菜の花句会

主催 八尾市教育委員会

共催 八尾市菜の花句会

主催 八尾市教育委員会

共催 八尾市菜の花句会

主催 八尾市教育委員会

共催 八尾市菜の花句会

(なんとなく迷い猫めに住みつかれ)
今もって三億事件迷宮入り
(迷宮で三億犯人昼寝する)

濁水

百見は一聞に如かず

中川晃男

「川柳塔まつえ」では、本年から毎月川柳塔本誌の「巻頭句を斬る」などと物騒な旗印を立てて、祥月氏ら同人六名が座談形式で遠慮のない句評や私見を斗わせ、司会役の通児氏がこれをまとめて機関誌「まつえ」に掲載している。しかし文字を読むのは耳で聞くのと大変な相違がある。私がそれを実感したのは、先般六人のさむらいが寄って討論した際、通児氏がこれをテープにとったので、私も初めて自分等の声を第三者の立場で聞くことができたからである。

六人の個性が夫々出ていて面白かった。ズケズケ思い切った発言の出雲訛が案外和やかで、人の句をやっつけてやろう等単なる批判に陥っていない、淡々としていて実に真剣なのである。総括すればみんな川柳が好きだということである。自己探究心が強いのである。句会といえど与えられた兼題・席題を何句か頭をひねって出すと、これを各選者が短時間に選んで披露する。入選した自分の雅号を大声で名乗り、佳作・人・地・天にでも入る

尋ねつつ迷いつつ旅路もう暮れて。
(人生行路尋ねたり迷ったり)
迷いから覚めればざらにいる女

同

と顔をほころばせてお終いである。これでは私のいつも云う「作りっぱなしの選びっぱなし」で内容がない。どこがよくて抜けたのか悪くて落ちたのか、自信のある句が没で数に揃えた句が入った場合など納得できない向きもある。これから先が川柳の本質を見きわめる大切なところではあるまいか。

さて元にかえして――、別に感情的になっているのではないのに文章にすると要点をしぼるのでつい角の立つ表現になってしまうのも、テープで聞くとむしろユーモラスでさえある。知っている筈の自分の声も他人めいていて愉快だ。

文章を読みかえすのもよいが一度テープで

一分間の柳論

且つて路郎先生に「作者が川柳だと発表したものはいち川柳である。可、不可は別として」と、又同一人の句を永らく選をしていると一面識もなくとも句主の年令、職業、生活までビタリと判る」とも私は教えられた。

近頃の川柳に判りにくいものや面白味の句が少なくなつたと聞く、所謂感覚味の句が多くなつたところからだと私も思う。革新的な句、感覚的な句は下手すると独善に陥る惧れがあ

題一底 九月二十日締切(十一月発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井三三二 〇七七一

本田恵二朗

も聞いてみて下さい。――
という訳で「百聞は一見に如かず」ならぬ標題となったのである。

★

川柳塔社常任理事会(八月四日)
むし暑い夜だったが、冷房のよくきいた本社階上で、例によって和気あいあいのうちに議題を進めていく。

十月八日の二賞発表句会と同人総会は道頓堀をまっすぐ東へ一五〇米「自安寺」の五階が会場ときまる。地方の方には近くに、「虹のまち」があり興行街あり、最高の場所。
出席 庸伯、栗、形水、薫風、生々庵、文秋、小松園、一三夫諸氏。

小西無鬼

る。川柳の定義に路郎先生は「川柳とは、人間及び自然の性情を素材として、その組合わせによる内容を、平言語で表現し、人の肺を衝く十七音字中心の人間陶冶の詩である」と。川柳は時代詩でもあり、現代柳人の句として、世の転変に伴い変るのも当然だがあくまで個性を生かした「川柳味」豊かな句を願うものであると同時に、「いのちある句」を残したいと念願して居る。

大 萬 川 柳

「鈍 行」

入選発表

選 者 川 村 好 郎
 入 選 五 百 八 十 四 句

大阪 葉子
 鈍行の負けてはおれぬベタル踏む
 大阪之 保

大阪 弥生
 鈍行で発った立志の日を懐古
 東大阪 弥生

大阪 江
 鈍行の旅情駅弁たべすぎる
 藤井寺 吸

高知 寛
 鈍行にして名物のそばの味
 高知 寛

今治 昌道
 一泊を浮かせる鈍行追い越され
 今治 昌道

大阪 水
 鈍行で得したようなハブニング
 倉敷 梁

和歌山 太茂津
 鈍行で拾うてもどる地方弁
 和歌山 太茂津

富田林 弥栄子
 生き抜いてきた鈍行の旅つく
 富田林 弥栄子

青 香
 鈍行の私一人が降りた駅
 青 香

大阪 清女
 鈍行でよしD51の役終る
 大阪 清女

大阪 清女
 乗り変えた鈍行故郷の香りする
 大阪 清女

守口 笑風
 鈍行の欠伸お向いからもらい
 門真 鉄児

岡山 止水
 鈍行へ人目をさけた逃避行
 岡山 止水

富田林 美代
 鈍行を一本残した新ダイヤ
 富田林 美代

大阪 阿茶
 行商の日銭かぞえている鈍行
 大阪 阿茶

橋本 木魚
 鈍行に乗り替え小さな浮気する
 橋本 木魚

橋本 木魚
 鈍行のままで定年駅に着き
 橋本 木魚

鳥根 正朗
 鈍行のわが人生に惹なし
 鳥根 正朗

愛媛 悠泉
 ここからは鈍行ウナ電握りしめ
 愛媛 悠泉

倉敷 千翁
 絵心が鈍行楽しい旅にする
 倉敷 千翁

鳥取 洋々
 鈍行で精一杯の誠意撒く
 鳥取 洋々

鳥取 洋々
 鈍行の夢は子に触れ妻に触れ
 鳥取 洋々

松原 重人
 鈍行も楽しからずやひとり旅
 羽曳野 可動

英 詩
 鈍行でもいいさ満ちる旅路なら
 英 詩

倉敷 克枝
 鈍行へ富士ののんと向きを変え
 倉敷 克枝

堺 天笑
 鈍行で見舞う心配のない病気
 堺 天笑

大阪 新之助
 飛行機で来て鈍行でまわる旅
 大阪 新之助

鳥取 豊生
 日本の美鈍行の窓に見逃さず
 鳥取 豊生

大阪 水客
 駅弁をつつき鈍行飽きもせず
 大阪 水客

大阪 誓二
 風との対話鈍行の窓開けて
 大阪 誓二

倉敷 素身郎
 鈍行でないと停らぬ町に生き
 倉敷 素身郎

大阪 痴亭
 学閥も派閥ももってない鈍行
 大阪 痴亭

大阪 滋雀
 鈍行のローン我が家につきまとい
 大阪 滋雀

岡山 白水
 鈍行でよしノルマは明日に賭けろ
 岡山 白水

八尾 酔々
 鈍行に先を越された人生譜
 八尾 酔々

岡山 七面山
 買出しの記憶戻ってくる鈍行
 岡山 七面山

岡山 久米雄
 鈍行でよしどうせ気儘な旅なれば
 岡山 久米雄

大阪 智子
 鈍行で話の種が切れかかり
 大阪 智子

岡山 千代香
 鈍行の旅は歴史を手繰りつつ
 岡山 千代香

大田 軒太楼
 鈍行は鈍行なりの夢をもち
 大田 軒太楼

鳥根 芳子
 今にみる鈍行誘りを気にしてず
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 血をうけた子の鈍行を笑われず
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 鈍行の気楽さ席をひとり占め
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 鈍行でよし人生に逆らわず
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 佳 句
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 鈍行を悟った奥にある苦惱
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 鈍行の乗りつき無沙汰へ顔を出し
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 計に急ぐ身へ鈍行のマイペース
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 鈍行も別れ惜しむに速過ぎて
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 鈍行が方言積んだり降したり
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 人ノ句
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 大阪 新之助
 鳥根 芳子

鳥根 芳子
 鈍行のテンポで峠が明けそめる
 鳥根 芳子

柳 界 展 望

あちからこちから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼麻生霞乃先生は府警発行の月刊誌「なわ」柳壇の選をされお元氣だが、「お旅先からの便りありがとう。若いうちにせいいいおちこちと旅行なさるようおすすしめします。老年になりますと歩くことからして億劫になり、テレビで日本紀行でも見ている方が案でよいと思うようになります。」奈良のふじ奈良の新緑見ずに夏来る「霞乃」

▼第二十四回西日本川柳大会は九月十日(日)午前八時三十分から岡山県久米南町の久米南中学校体育館で開催。兼題、慣く・フイーリング・庶民・音・ドラマ・競う、各題二句以内、選者は三条東洋樹・西尾菜・大森風来子・岡崎徹平・北村泰章・浜野奇童、投句は二百円封入して九月五日までに縦二十二種、横四・五種の句箋(裏に雅号を明記)

で、岡山県久米郡久米南町下弓削、弓削川柳社宛。▼昭和四十七年度文化祭川柳大会並第七回川柳文化賞贈呈式は十一月三日午前十一時から東京都中央区新富の印刷会館で開催。兼題、第一部(出席者)博學・通せんば・流転・予感・繕う・群がる・オアシス・消す第二部(投句者)賑やか・地図・おいてきばり・大仏・ネオン・腕前・蜘蛛・ぶらんこ(各題三句)、投句は、第二部兼題作品を各題別紙に書き二百五十円封入の上十月二十日迄(消印)に東京都文京区千石三の三五の三曰倉寿夫宛。

▼川柳宮城野三百号記念、「優秀作家賞」作品が募集選者には吉岡竜城・中島生々庵・磯野いさむ・北川絢一郎・野口北羊・関水華・高木夢二郎・小谷源氏・山中鹿之助・後藤柳允・直江武骨・村上夕帆・菅原一字・伊達南谷子・後藤閑人、優秀作家五名に呈賞、参加料不要(発表誌宮城野十一月号希望者は百五十円同封)九月十五日迄に仙台市東八番丁一七〇川柳宮城野社宛▼昭和四十六年度北海道川柳年度賞・川柳連盟賞が発表になった。

川柳年度賞(連盟賞状・川上三太郎色紙・副賞に一万円) 流川市 斎藤正人 作業衣に似合う勲章なら欲しい 引き返す勇気を妻子から貰う 川柳連盟賞(連盟賞状・記念楯) 深川市 石橋 哲 肩車この首枷に満ち足りる 馬鹿になることもお金に教えられ 砂川市 大橋 政良 運不運神の落書かも知らず 命一つ買えない金を溜めつけ 滝川市 斎藤 栄 ちっぱけな悩みを笑う地平線 死んでから他人が決める運不運 小樽市 小内山恵子 きょうだいの居る幸せを父母が呉れ

▼河相すすむを偲ぶ句会は

子の返事親の銀がはね返り▼第二十三回名古屋短詩型文学祭作品は近作三句をハガキに明記、住所氏名雅号並記し、九月十五日までに名古屋市中区三の九名古屋市役所社会教育課文化係宛▼奈加川(名古屋文学)第二十号は斎藤旭映追悼号として七月一日発行。

▼田中金一郎・桂枝太郎喜寿祝賀川柳大会は九月十五日(金)午後一時から料亭柴又川甚で開催。

▼よしなが川柳社恒例のうどんなつりは七月十六日金剛荘で開催。

▼かがみ川柳社九月例会は二日夜兼題、日焼け・口止め・手腕・雑吟、十月例会は二日夜、兼題、切札・民宿・便り・雑吟、共に池田古心居。

▼番傘川柳つくし会十周年青木三碧句集「大団」発行記念川柳大会は、九月十日(日)正午から新和歌浦観光ホテルで開催。兼題、誘光・女・苦勞・顔・大陸、会費三千円(記念品、句集、著者揮毫色紙、大会誌、懇親会費)参加申し込みは和歌山市八番丁県信ビル内ライオンズクラブ事務局宛

▼八月二十七日(日)午後一時から鳴尾公民館で開催。▼第五回島根県芸術文化祭作品が募集されている。創作三句をハガキに書き種目名川柳と朱書、住所氏名を明記、九月十六日までに松江市内中原町島根県立図書館奉仕課文芸作品係宛。なお川柳の部選者は尼縁之助氏の推薦で藤井明朗氏と決定。▼若本あき坊氏(ハワイ同人)は七月二十七日逝去。八十二歳。関連記事P43 | 謹悼。

▼川柳こなゆき七月号は通巻二百八十号記念誌上川柳大会作品集を掲載。

▼第二回瀧明忌川柳大会は八月六日午前十時から熊本市白川公園内社会教育館

▼「岡山の文学」が出版され、四十六年度岡山県文学選奨作品集が掲載になった。川柳の部、入選島津介氏、次選福田豊作氏、長谷川紫光氏、佳作本田恵二朗氏、浜田久米雄氏が本社関係で入選された。

まあ我慢なさいは妻も怒ってる 雄大な構図で妻が攻めてくる 豊作 紫光 一本杉写して池の独り言 恵二朗

善人の耳もつともなことに聞き 久米雄

▼菊沢小松園氏（大阪市同人）の作品、鬼白句が、河内長野市の天幕書房発行の鬼の会機関紙三月号に掲載された。「一日一善鬼もやっぱりそのつもり」

▼若本多志氏（西宮市同人）長男芳彦氏に七月六日男子出生、克彦と命名された。結婚以来六年目の初産に多志氏のお喜びようは一入である。芳彦氏の妻女百合さんは小松園氏の次女「明日の夢育てて居ます鯉小松園」

▼本田恵二郎氏（倉敷市同人）は一カ年ライオンズ会長の重責を無事果した次期会長にバトンタッチされ、年次大会での奉仕事業優秀銀賞の受賞をはじめ種々の受賞の榮譽を受けたかなりの成果をあげたと自負しておられる。川柳に一層ご尽力載けるようお願いす。

▼若本多志氏（西宮市同人）は七月二十八日から八月四日へかけて松山から足摺岬までカー旅行一面河溪クレーターなしで身がちぢみ—多志。

▼奥谷弘朗氏（倉吉同人）は七月二十三日片山津温泉

から句信。役所のレクリエーション旅行で永平寺、兼六公園、安宅閣など周遊された。「永平寺さすがに威厳を感じたり」

▼吉原紅月氏（高砂同人）は国鉄川柳百六号に「連盟に望む」と題して建設的意見を開陳された。

▼永松道雄氏（八代同人）は病氣入院に続く水害で難渋されたが、ようやく一段落、川柳を心がけるつもり

▼鈴木村諷子氏（鳥取県同人）は噴煙二百六十九号の噴煙随想に「川柳と人生」を執筆、句は「生の確認」だと強調された。

▼山田季賛氏（高槻同人）は七月九日高野山へ。十四日には伊勢の波切、大王岬へ。山と海の空気に親しまれた。また、広島新幹線工事局軌道要員として八月二十九日転勤赴任された。

▼柳楽鶴丸氏（松江同人）は一部屋を川柳部屋「松露苑」と称し、諸先生の色紙短冊を掛けて休息の場としておられる。

▼林瑞枝さん（米子同人）は家の増築、令嬢の縁談や交通事故と禍福の雑用に追われてる由

▼板尾岳人氏（富田林市同人）は七月二十八日信州白馬山頂から寄信。「大切にすから山は怒らない」

▼岡崎祥月氏（松江同人）中川晃男氏（松江同人）の両氏は第五回島根県芸術文化祭川柳部門招待作家に推薦された。

▼高杉千歩さん（八尾市）の作品「驟雨」が新美術協会主催の色紙文化展で白寿賞を獲得、大阪市立美術館で七月八日から一週間、展覧され好評を博した。

▼「終戦秘話を聞く会」とその記念川柳大会が、十月十五日午後一時開催。会場は東京都台東区柳橋一の一五、東京文具販売健保会館。題「終戦前後懐古、藤島茶六選」頭韻、高峰茶の九選。現代世相百態池口吞歩選。投句料百円、九月末日締切。一九〇一二、東京都武蔵野村山市

中藤三二六〇、むさしの住宅九一〇六、池口吞歩宛。なお講演は迫水久常参議院議員、会費三百円。

▼川柳道場（倉敷市）は百五十号記念に中国五県選抜活動作家作品互選会を催し百名の推薦句者、三十九人の選者（道場会員）で覇を競い、山口市の山県双華氏が首位に入選、互選牌を獲得された。森井善居氏（竹原市同人）は借しくも次点。

鳩は帰らず少年の掌に重い夜 山県 双華
一介の凡夫になれる夜が 森井 善居
好き 村上春巳氏（姫路同人）は八月六日から三日間、四国をドライブ横断、足摺岬では瀬戸の海では見られぬ美しさを満喫された。「足摺の空気で肺を洗ったとき」

▼日米交歓川柳渡米記念と

して「大陸の花嫁知事に見送られ 万古」——「貞淑なふきんに昼の自由あり 好啓」——「逝くときは赤一色に点すべし 良子」の手扶いを知人に配られた。

▼第十六回水郷夏の川柳会が大洲市水郷川柳社主催で開かれ、海を起えて東野大八、田中好啓両氏が参加、盛会だった。

▼南大阪川柳会は九月二十日（水）午後六時、題は「気疲れ・快心・余韻・詰所」会場は松崎町以和貴荘。

▼南海川柳会は九月二十一日、題は「社員食堂、執念」期待—会場は南海電鉄本社食堂内。

▼川柳東大阪同会は九月二十三日（土）午後六時、題は「板の間・流れ星・いたわる・ローカル」会場は近鉄永和駅前市民会館内。

社 告

橘高薫風氏の身辺多忙で十一月号からの柳界展望欄は有信新之助氏が担当します。

川 柳 塔 社

本社八月旬会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

うだる暑さに、それでも多くの方が出席してくださった。

まず栞氏の柳話から幕があく。木曾路の旅で、東野大八氏の柳話がよほど感銘深く胸にきざまれたのであろうか。藤村のあれこれが再現する。

はなしが宿場の本陣に移り、当時の本陣のあり方などを史実にもとずいて語られた。

原爆追憶の句には生々しい国民感情があらわれ、ジーンと胸にくるものがあった。月間賞杯は菊田いさむ氏。(河井庸佑整理)

出席・新之助・たかし・与呂志・重人・静馬・緑水・百酒・酔々・肖二・柳宏子・文秋・柳志・野迷路・瓢太・綾女・いわを・儀一・美代・幸太郎・凡九郎・葛城・一舟・維久子・一三夫・形水・三十四・好一・はやを・南柳・柳信・太茂津・生々庵・いさむ・吸江・悦郎・古方・茂美・葵水・天笑・岳人・修史・之保・宣介・好郎・牧人・金三・智子・静香・君子・小松園・頂留子・栞・一二三・鬼遊・庸佑・薫風・季賛・葉子。

▼前号P五八上段四行目は通児氏の句。

席題「看護婦」 香川酔々選

心までぬすむ看護婦と親知らず 凡九郎
看護婦へ無駄口叩く程に癒え いわを
熱心な看護婦敬遠されてはる 凡九郎
看護婦の気文さ外科に回される 文秋
見舞客看護婦さんが妬いてる 牧人
看護婦の不足でベッド遊んでます 幸太郎
御見舞の帰りに看護婦にねぎらわれ 悦郎
看護婦の変身というクラブ 柳信
同じこと聞かされている婦長さん 葵水
なりたての白衣の天使に血を採られ 鬼遊
看護婦は静かに入れと紙をはる 静馬
看護婦のどこかに残る国訛り 静馬
婦長の眼にまどろっこしいインター 馬
看護婦の切り口上に尻込みし たかし
看護婦に頭を下げて部屋をきき 葵水
今晚が峠 看護婦無表情 静馬
看護婦の今日は不機嫌な注射針 静馬
休日の看護婦口調まで変り 儀一
看護婦が医者の弱点握ってる 香
看護婦も術後のガスを待ってる 好郎
見習いという看護婦の真剣さ 庸佑
看護婦の目をかすめて出る回復期 金三
看護婦が山の話もしてくる いわを
看護婦の仕草さは普通の仲でなく いさむ
看護婦に叱られもして親しまれ いわを
看護婦に聞いてもただの胃病です 好郎
看護婦のミスがニセ医にまで及び 新之助
白衣ぬげばあまり美人と思われず 綾女
看護婦の割り切りかたが気に入らず 天笑

席題「ビール」 西いわを選

看護婦へちよっぴり妬いた妻の文 天笑
看護婦の詰所で蚊咬叩く音 酔々
気のぬけたビールのような人と添い 好一
ビールつぐ少しにすきを見つけた 一舟
ビールなら少しは受けるお付き合い 文秋
よう飲んだビールで寝る間の旅路 新之助
シャッターをおろしてビール俺の 葵水
腹の底まで一直線の生ビール 生々庵
うかうかとすれば女房の大ジョッキ 柳信
ビールびん縁にころがし法事すむ 美代
一本のビールで女過去を出し 美代
きこちない酌もよし妻とビール飲む 一三夫
気の抜けたビールで俺のことかいナ 凡九郎
ビールでは酔わん女と気がつかず 一舟
小ビール大きな男にして呉れる 岳人
乾杯のビールは後でお手が鳴り 葛城
妻に注ぐビールの泡に嘘ひとつ 宣介
ビール飲む窓すれすれの高架線 葵水
ビール一っ気に乾す風鈴に風があり 牧人
ビール爆たたく酒宴というなごみ いさむ
味しめた妻が進める生ビール 柳信
ビール飲む女社長の大ジョッキ 静馬
星空に女がにぎる大ジョッキ 与呂志
お通夜でよばれるビール泡立たぬ 形水
屋上のビールヘデットためらわず 文秋
働いてのビールの味を女知る 維久子
まだ妥協せぬかとビールせき立てる 古方
だまってビール一本ついてくる 古方

リュックサックの中でぐちゃぐちゃに
ビヤガーデン意気統合の大ジョッキ
紅唇の気炎があるビヤホール
ビール飲む部屋にクーラーきつず
小瓶をこねせぬくせにビール腹
割勘をビールですます名幹事
優勝へ栓ぬくビールの音もよし
栄転と左遷屋台のビール瓶
短冊を頼むビールの栓をぬき
孤独という夜のビールに底がない
一杯のビールで日本改造論
神様もビールの方がよい暑さ
ビール飲む女の強い語にひるむ
ほっとして帰ればビール冷えかけん
屋上があればビールのネオン灯

席題「虚勢」

垂井葵水選

虚勢でもよいから咬叩切って欲し
うらぶれた虚勢のれんぐぐ特級酒
飲もうかと言うてる方に金がなし
ドライブヘレンタカーとは言葉乗せ
はって来た虚勢精々持床柱
虚勢張る人が家ではホウキ持ち
その虚勢山の余白に埋めておく
言い負けて没り陽まともにある虚勢
虚勢張るその内酔いがさめてきた
虚勢かも孔雀とべない羽根広げ
奥さんに聞けばそれ程儲けてず
見えすいた虚勢が独房に来て崩れ
かまきりの虚勢ステッキへ身構える

葛城 吸江 吸江 牧人 野迷路 柳信 岳人 宣介 一三夫 美代 好郎 生々庵 柳志

虚勢張ってもやっぱり妻が欲しい
虚勢から生まれた嘘が嘘を生み
寄付帳のトップクラスにいる虚勢
パチンコ台叩いて虚勢張って見せ
前借りをして迄旅をする虚勢
軍歌高唱虚勢をおる世が怖い
人情に飢えて虚勢の肩が硬い
何時までの虚勢ぞ団交日々硬化
虚勢でも張るから信用まだ残り
捨科白声だけ大きくはね返り
ハッタリが利いて個展の中に
マイナス虚勢私に残るもの
青年の虚勢を浪が受けとめる
謙譲の挨拶虚勢ちらつかせ
悠然と構えて心砕いていく
女一人の弱味みせない眉を引く
くずされる虚勢へ我執の鬼となる
純白の手套虚勢でない守衛

兼題「ビール」

本多柳志選

白画像を包むビールが薄すぎる
僕の恋みんなビールごしの恋だった
月は斯うだと科学はしたくない
逢引きへ月が機転のビール着る
貴婦人の見栄がビールに匂った
やっとなビールかむてくれた嫁
ビールもうはずしてよからう銀婚式
終電車女はビール脱ぎ捨てて
とる日までビールはそっとしてお
透き通っててもビールのいる女
四苦八苦かくすビールがすけている

緑水 柳信 静馬 金三 肖二 太茂津 美代 幸太郎 一三夫 柳宏子 いわを 凡九郎 酔々 好郎 牧人 柳宏子 凡九郎 葵水

ビールはがすと恋人が逃げそうで
ほろ酔えば女ビールを脱ぎたがり
ビール脱ぐ女に失うものばかり
ビール取って見たら成程とった
ある殺意ビール一枚ずつ脱いで
二枚目のビールはがしに來た女
ピンク色のビールで嘘も包んどき
そのビールとれば中身の無いわさ
どう見られようとビールのない暮し
今日切りのビールを職場に置き
ペリ取ったら君そ顔で生きて
言い訳のビールはぎ取る妻の勘
魅力あるうちはビールに包んどく
愛というビールで包んでいた鎖
ヤリクリはビールにつつま妻達者
掟あるビールを脱ぎたいなと思
釜ヶ崎に住んでビールが邪魔になり
ビール越し見た中国をはめちぎり
ビールぬがせば何でもない女

ベールぬいでみればえくぼが泣いて
宿命の黒いベールの中で泣き
花嫁のベールは過去を飾るもの
仲人がベールの中の脈をみる
ベール着た女は過去を秘めて嫁
美容室で夜のビールをかけて
新婚のどちらもビール着て暮らし
控え目な恋はベールの外に立ち
ベールの中の大人の世界見しま
財産に惚れたベールを着て並び
デイスカパージャパンPCBの匂い

天史 修史 野迷路 葉子 天笑 維久子 岳人 好郎 凡九郎 悦郎 柳信 葵水 悦郎 君舟 一江 吸江 生々庵 緑水 鬼遊 美代 好一 新一助 維久子 緑水 文秋 新之助 柳志

兼題「昼寝」

菊田 いさむ 選

スカートのすねまでめくれても昼寝
閉会の辞へ昼寝のさめたタイミング
風鈴が風を送っている 昼寝
昼寝するコトも覚えて子を宿し
散らかした玩具の中でひるねの子
長襦のまゝ昼寝する 魚市場
畳の形つけて昼寝は起きて来る
まだ旅から覚めて一日取り違え
退院の疲れが残っている 昼寝
昼寝しておくと新妻いたわられ
銀婚の妻天下泰平という 昼寝
休日の昼寝も楽し宮仕え
クーラーの実家へ昼寝をしに帰り
板わし大工器用に昼寝する
中元の呼鈴昼寝が起きてくる
昼寝のせいはかりではない眠れぬ夜
昼寝からさめて夕餉のかごをさげ
うつらうつら電話が鳴っている 昼寝
昼寝した来た冷房の映画館
売っ子は僅かな暇をみて 昼寝
昼寝していただけなのに疑われ
遠雷と風鈴が鳴っている 昼寝

兼題「貝」

大坂形 水選

大阪で出雲の貝のおみおつけ
蛸壺の貝殻恋がもつれてる
静観堂

蓋持たぬ鮑の私語のあわれとも
貝殻を合わせて海鳴り遠く聞く
澄んだ所ないかと貝の一人言
煩悩の銭の始まり貝と言う
渚の貝一番星に恋を逃げる
貝の名も知らぬ武骨さ恋を逃げる
居住権持たない貝の不仕合せ
逃げる知恵しらいぬ公害へ貝に死
ひとことをすべし女貝になる
名物も幻の貝となる 干潟
逃げ込める貝を背負って 平社員
居心地のよさやどかりに開志なく
バケツの底田螺自虐の詩唄う
ちゅうちうよく泥吐くことを貝に
二枚貝やがては離れてゆくさだめ
学説を化石の貝がくつがえし
こじあけて貝に汚染を訊いてみる
貝殻を握っていたり失恋記
貝の一生抗議は殻を閉じるだけ
砂丘に人待ち顔な 桜貝
味噌汁になる間をバケツにいる 蜆
掛軸の横に座った帆立貝
一生を川底に居る貝もあり
便り待つ女が拾う 桜貝
人間のエゴが真珠をはぐくませ
水平線通か旅愁の貝拾う
ファイリング堅く貝もゆるみかけ
貝殻の模様は文化に汚れない
グロテスクなからだを隠し貝は生き
迷宮の容疑者貝となつたまま
月の雲を抱いて貝は珠を産む

一栄

舌出している貝生きている証
掘売をされるあさりのひとり言
引き出せばさざえの尻つばすなお

幸太郎

豪城

川村好郎 選

豪城
一三夫
緑水
葛城
美代
緑水
滋雀
祥月
豪城
一三夫
緑水
金三
葵水
幸太郎
醉々
幸太郎
小松園
新之助
新之助
天笑
古方
柳宏子
静馬
維久子
天笑
肖二
牧人
柳宏子
悦郎
一三夫
美代
牧人

兼題「原爆追憶」

川村好郎 選

核つくる知恵で禁止がなぜ出来ぬ
星は流れ被爆のドラマまだ続く
原爆忌あの日と同じ陽はそそぎ
永久に鳴らそう原爆鐘の音
被爆手帳まだ役に立ち原爆忌
ケロイドに顔をそむける心の眼
原爆忌あの日も暑い朝だった
ノーマアヒロシマ神の怒り声と聞け
原爆がまだ地球にある暑い夏
クーラーの椅子で原爆テレビ見る
ケロイドの化石となれ原爆忌
老眼鏡の記憶に残るキノコ雲
忘れたし忘れたくなく原爆忌
ドームだけ残りの川に影映す
原爆忌風化させまじ子や孫に
竹槍で原爆迎えた物恐怖
ケロイドが忘れさせない日の恐怖
原爆ドーム観光客は何と見る
痛恨の想いを手繰る原爆忌
日本に原爆という踏絵
原爆忌アトム想わす雲の峰
平和塔友の眠りを覚ますまい
怒りこめて被爆を語る眼が赤い
原爆広場無心に鳩は餌拾う
原爆忌積乱雲に目をを餌拾う
▼以下三才と軸吟は前号に発表

幸太郎

好郎

生々庵

席題「玄関」

岡崎祥月選

妻の声背中で聞いて朝を出る 久司
玄関に男下駄並べ女一人住む 三十四
玄関の重みに旧家耐えている 柳宏子
臨終か玄関靴の乱れよう 葉子
玄関へ犬も尾を振り出迎える 牧人
ふりかえる玄関隙のない構え 天樹
働いて建てた玄関とも見え 柳志
はきものはきちんと玄関冷た過ぎ 太津
三つ指の玄関先で言いそびれ いさむ
ただごとで無い玄関のあわて 没食子
団樂のぬくみは玄関にまで溢れ 滋雀
招かざる客玄関であしらわれ 之保
玄関を素通りしての飲仲間 いわ
玄関に亡き母に似た声を聞く 酔々
玄関を出れば妥協の顔でなし 水客
猛犬がいると玄関女文字 正朗
玄関の押問答は妻が勝ち 明朗
唯今も声高らかに幼稚園の孫 三十四
玄関を出れば偽善者の一人 可動
玄関の声つつ抜けの台所 幸太郎
玄関でよばれる酒の人の台所 清人
結納の日の玄関へ水も打ち 通児
この家の家風玄関でわかり 勝晴
玄関の甘ったれ声も妻のもの 清人
玄関で大きく息つく酔加減 一三夫
玄関のクツあっち向きこち向き 岳人
玄関に妻の笑顔が咲いている 水客
鍵っ子が玄関先でママを待ち いさむ

兼題「爪楊枝」

藤井明朗選

玄関の花が家風を匂わせる 牧人
紋次郎張りて楊枝を飛ばす孫 綾女
爪楊枝又は思案を纏まらず 智子
立ち合い演説隅できいてる爪楊枝 葉子
爪楊枝女はそっと胸に抱く 天樹
いい噂聞く茶柱の爪楊枝 いさむ
爪楊枝妻の小言をきき流す 花梢
爪楊枝かんでも思案まとまらず 鬼遊
耳搔きに変身される爪楊枝 静馬
晩酌の追加がほしい爪楊枝 いさむ
商酌はまとまりました爪楊枝 葉
会費だけ飲んで来ました爪楊枝 清人
爪楊枝一本持って心足る 天笑
爪楊枝いらなくなつた総入歯 徹舟
父頑固きげんの悪い爪楊枝 祥月
団らんの手料理がよし爪楊枝 重子
なるようになった悠々爪楊枝 葉子
生菓子に風流すぎる爪楊枝 誓二
テーブルマナー楊枝を使う手をかき 英詩
交際費にしとけと社長の爪楊枝 摩太郎
爪楊枝叱つてくれる人待ち いわ
焼銀杏団子につなぐ爪楊枝 静馬
名案が出たか爪楊枝動かない 太津
爪楊枝思う歯並びの悪い人 凡九郎
爪楊枝さったままのかたみ抱き 保
爪楊枝へねらいをつけた爪楊枝 正朗
歯のスキに年を知ってる爪楊枝 文秋
爪楊枝余世のほどは受けあえず 水客

席題「ビジネス」

三条東洋樹選

飲み歩くのもビジネスという身分 飲
ビジネスと言うには過ぎたおくり 飲
ビジネスとなればきびしい貌の友 飲
ビジネスで勝負アニマルと言われ 飲
ビジネスのきびしい年功生かされ 飲
ビジネスとしてのゴルフへ気が疲れ 飲
ビジネスのつくり笑いにつつまれ 飲
チャルメラにビジネスの灯が狙われ 飲
ビジネスの嘘をまともを受けて恋 飲
ビジネスの旅ライバルと同車する 飲
ビジネスの非情に僕は馴染めない 飲
ビジネスの延長バーで火事に会い 飲
ビジネスで乾す盃へ酔い 飲
ビジネスとしての言葉は用意する 飲
ビジネスに徹した指でキイ叩く 飲
ビジネスとして割り切っている裸 飲
ビジネスのようにはいかぬ燃える恋 飲
ビジネスのつづき逢引き味気なし 飲
ビジネスの余燼をデパートに消しに 飲
ビジネスとあらば私も脱ぎますわ 飲
ビジネスで来て雀卓へ引っぱられ 飲
ビジネスに移る靴をそっと開ける 飲
ビジネスと割切る声で電話する 飲
何処までがビジネスやと妻が妬く 飲
お黙いもビジネス化して大安日 飲
ビジネスの谷間で恋が待っている 飲
ビジネスへキラリ男のきびしい眼 飲
食うて寝るだけがビジネス檻の虎 飲
ビジネスに片付けられて口惜しがり 飲
ビジネスに徹し切れない自己嫌悪 飲
ビジネスはいこれまてミストルコ 飲

潮花 緑水 鶴丸 清人 志人 柳志 牧人 古方 博也 牧人 水客 幸太郎 形水 荒助 小松園 太津 誓二 通児 紫香 英断 静香 好一 花梢 重人 荒助 徹舟 博也 醉々

を地柳増

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

八尾菜の花川柳会（前月分残り）

ネオン管明滅機内に星を見る 孤風
ストレスの靴にけられる石のある 鬼遊
邪魔をして恋を育てている 好意 凡九郎
新婚に隣りの部屋は邪魔がられ 喜風
石ころにハッ当たりしる待ち呆け 茂雄

川柳ささやま

河原みのるの報

傷口の痒み嬉しい 抜糸の日 近江
傷口に吹っかける焼酎飲んじまい 拓
半端品ばかり集めて一人者 喜美代
割勘の半端女へまた譲り 初音
半端でも残る人生強く生き 素水
見切品の値段の半端尚値切り 雅佐女
敵もさる者ッカケを許さない 英の
きっかけの言葉を取り道して 搜す
役員改選の裏にあったプログラム やす子
飛び入りへプログラムにない拍手々 清香
義理のある人の出番に顔を出し 掬水
プログラム桜の花びら吹いて 読み 八陣
プログラムうっとうしい空見較べる とおる

プログラム停電までは考えず 百合子
プログラム父の財布が当てにされ 可住
良い調子浮いてきた頃来る迎え 村雨
満点に近く縁遠くいる 一声
細しやくへアハハと笑ろも肚が出来 無鬼
どんぐり川柳会（大阪市） 谷垣史好報

大声で叱った父が早寝する 悦郎
出世した男に顔を忘れられ 鬼遊
汚職まで巻き込む粗品とは知らず 好郎
忘れられ結城の藍が匂う娘よ 痴亭
境内も屋上からは見降ろされ 比呂路
号泣の止まぬ迷子をもてあまし 勝恵
記憶喪失どんな世界の夢を見る 重夫
借金に行き大声で取りつがれ 真砂
屋上で月の神秘を考えず いわを
お骨まで忘れて取りに来ないひと 儀一
忘れた人のうしろを歩かされ 小松園
物忘れ頑固な父も弱音吐く 喜風
小さい本社だが屋上から富士が見え 薫風
巻きぞえが一番大きなけをする 之保
大声で迎えた割にはもてなさず 修史
人間を忘れて科学突っ走り 河泉
すぐメモにする辭がありすぐ忘れ 吸江
忘れてた自分に戻る停年期 緑水
妻と来て忘れる程の美人おらず 岳人
忘れたい夜によく似た遠花火 弥生
屋上に私の干し物があら夜が更ける 好生
屋上のこれは助からない高さ 史好
あすなる川柳会（大阪市） 山本素郎報
ぎりぎりに来てそりかえる床柱 ゆきを
これは直ぐ返すと前のは放つとく 気百 酒

直ぐ開くような金庫をまかされる 青香
文豪はこの世をひとりガスで閉じ 宏
児の金庫指輪ワッペンガラス玉 慶の助
チップ置きあつさり帰ってゆく野心 好郎
簡単にいうぎりぎりは儲けてる 素郎
ぎりぎりの線まで泣いて妥協させ 恵美子
オーエスケー川柳会 大坂形水報
すれ違う同じネクタイ上を向き 大山
ネクタイを解いて結んで首かしげ 松尾
ワイドタイバランス合致 交換し 青谷

ネクタイを二人で締める新婚さん
手のしわを苦勞性だと笑う母
奥の手も通じぬ羽目の終盤戦
バスに乗る楽しみだけで幼稚園
甲子園勝った涙を手でぬぐい
ネクタイのしみが氣になる初デート
母の手に人生模様の縮図あり
日本の頭越しに米中手を結び
ワンマンカー地方者には不親切
手の古傷の一つ一つにある記憶
バスの窓思ひがけない人に会い
バス停にいつも人が来ない朝
ネクタイを選る楽しみを妻にあげ
政治家にくらべりや僕の手はきれい
手をつなぐ庶民パワーが強くなり

舟影 酒井 幸太郎 美露 西岡 中西 三 南 常夢 千夢 健夢 一扇 有田 神田

金運のない手相まで親に似て
若さへのあこがれネクタイ派手に
バスの列抜く四車線の速度計
片方の手は贈賄を拒んで計
南大阪手柳會 金井文秋報
青春を散散させる ヘルメット
酒に吞まれて男野生にかえる
手折られた野生は街の朱に染まり
闘牛の野生に夢を賭けている
喜んでくれると信じ世話をやき
野生美は演出不いボーイズなり
自叙伝のここで青春終らせる
喜びの次に不幸が来る不安
未だ昼の公園廻るだけの恋愛
青春をレジャーに呆けて平和です
君子 葵水 古方 恒秋 文子 滋雀 肖二 好郎 入仙 木石

雅号ぶっちゃけばなし (100)

くしら



岡村 久志良

おかむら

同人合同句集「私達」や「川柳とは何か」
「新川柳鑑賞」等で、故路郎師に句を拾って
載いた頃は牛耕。生来、自他共に許すスローモ、
よしや牛の歩みののろくとも、大地に足をつけて、自
分の畑を耕やそう。すごい決心で出発はしたが壁、
心機一転のつもりで改号。武蔵国久良伎郡に生れた阪
井久良俊翁、邑久町福中宇久志良に賸の緒を切った
私、久と良二字まで相通ずる点に着目、いみじくもそ
の奇縁にあやかるうと、爪の垢を煎じる思いで久志良
とした。主幹のあとを追うように、私も又五月末渡米
した。「ジャンボゼットが墜ちても、くじらだけは太
平洋を泳ぎ切って帰る」とみんなを笑わせたものでは
ある。
公民館長(六十五歳)

食うただけ皆青春の肉となり
公害の猛威野生の場に迫る
人間の知恵を笑うている野生
月冴えて犬の目野生を取り戻し
エプロンのままで実家へまわり
三分咲きの菖蒲にさつき色を添え
よく回る舌で憎まれ口たたき
青春の暴走と本人思っつて
予備校とはなに青春への疑念
よろこびは新居の鍵にある
高原の野生の花にある
よもぎ摘み野生の幸はまだ失
青春を語り明治を威張る父
はばからぬ恋は青春なればこそ
浄土への喜び乗せて霊柩車
七面句會 三幸報

女装にあこがれあたら男の眉を刺る
晴舞台他人のしらない風が吹く
あこがれは遠く眺めていて
出前持ち夜店の客を泳ぎ抜け
政治家にあこがれ残る井戸堀か
舞台から降りて社長御挨拶
あこがれは生ある限りためて
拘わられて夜店の金魚疲れてる
夜店見て妻たこやきを買った
大臣を友達にして売る夜店
川柳東大阪 竹中肖二報
足ふみと言う知恵が出てすり抜ける
チンドン屋陽気に流し明日が無い
勇敢な軽装の娘が居る車中
子等陽気親のピンチは知らされず
ほっとした顔でスリッパ片付ける
悦文儀富古
郎秋一久方

足ぶみも声高らかに労働歌
ライバルの左遷陽気に送り出し
産み終えた喜び乗せたエレベーター
過疎の尾を引く分校の新学期
エレベーターじつとこらえている囃
降りて来る気が無さうエレベーター
スリッパを飛ばしゴーゴーまだ続く
足ぶみに一転三転した社運
しくじりを陽気のせいにして笑い
エレベーターキッスを押しまれ
屋上で抱つことおんぶ押し込まれ
天気図を乱し足ぶみしてた夏
粗品進呈へエレベーターを利用され
鉛筆が皆尖つてゐる新学期
新学教育ママの目が光り
エレベーター社長に背中向けて立ち
課長補佐から足ぶみの続く椅子
スリッパを踏んで急患つばしる
堺・若芽合同句会(堺市) 和海藻春報

梅雨だから一言医者も付け加え
うらめしい梅雨を見ている宿の風呂
梅雨ゆえにタンスの中も調べて見
終バス夫婦が降りた雨の中
強敵の一撃さよならホームラン
責任を与える仕事精を出し
官庁の火事漏電にしてしまひ
責任ある日反論したくなり
生死を演技で乗切るドルシヨック
人生の演技へ幕の予告なし
三代目血は争えぬ芸を見せ
めんないへお手で揃わぬ児もまじり

三十四
肖二
綾女
誓二
酔々
凡九郎
弥生
思月
鶴生
恒明
新之助
葵水
一栄
牧人
あいき
湖風
竹充
古梅
清女
徳子
志寿
夢成
誓二
備後桜
摩太郎
宏子
紅月
柳信
青香
儀一

手拍子の揃にごまかす下手な唄
揃い踏み面倒くさい顔も居り
女連れやつと割勘の気が揃い
捨てられた憎しみよりも思慕に哭く
憎いのか見込みあるのかなられる
愛情のにくしみ明日に脊を向ける
憎くまれた割に長生きして居らず
憎くからず思えど木枯紋次郎
川柳しんぐう 大矢十郎報

辞書にない単語出てきて汗をかき
辞書も見ずひら仮名で書く無精者
この辞書も嫉妬という字は女偏とよ子
エッチとは辞書にも載らぬ言葉かな
学者から辞書引用の返事来る
辞書を買う金はたびたび持つてかれ
命名を辞書まで出して定まらず
また割った音お勝手に息ひすめ
一人聴くラジオ一人の音にする
グラグラと煮えてる音に幸せを
旅立ちの別れを惜しむ汽車の音
風の音心にしみる一人旅
世界地図開けばベトナムの音がする
ふり向かぬ足音闇に消えて行く
音沙汰がなければないで母の愚痴
エレベーター降りれば障子の座敷
お隣りも障子を張って嫁迎え
障子の眼探してみたが見当らず
ちっぽけな障子穴から光さす
破れ障子いたずら孫の来たしるし
一マスは猫にも権利ある障子
女房が俺を褒めてる障子越し

柳影
葵水
好郎
一二三
天笑
千万子
笑痴
小松園
計
純滋
とよ子
晴美
弘生
つる枝
ふみよ
まさ子
富子
千宜
光代
裕子
悦郎
雀踊子
千寿子
暢
君代
良造
章代
義孝
久司
十郎

第15回 近県川柳大会(竹原市)

▼九月三日(日) 午前九時開催

▼題・船・抵抗・しつぽ・民族・裏・学歴・ポケット・塔・輪。(特別課題一題)

▼詳細は七月号柳界展望参照。なお本社から中島生々庵主幹、菊沢小松園副理事長が出席予定。

第1回 小松川柳大会

▼九月三日(日) 午前十時〜午後五時

▼小松市小馬出町 小松市公会堂において

▼題・自尊心・ハブニング・削る・惜しい・虫・ベスト・いのち(本社参事、伊藤茶仏選)(当日不参加者の投句は受付せず)

各題二句。会費五百円。

▼本社参事、八木摩太郎氏が席題選者として出席。

▼連絡先 〒九二三 小松市本町一丁目一〇 吉田秀哉(電二一・一〇三五)

第8回 山陰川柳大会

▼九月十七日(日) 午前十時より

▼会場は鳥取県東伯町中央公民館

▼題・流水・愛称・墓参り(各題二句)

席題は当日五題発表。

▼会費五百円(記念品、軽食、発表誌呈)

▼懇親宴五百円(賞は読売、町長、議長他

川柳 大阪

児島与呂志報

ちゃん付けで定年近い人と呼ばひ本蔭樺
半袖にミニもさつそう初夏の街三十四
一年の手塩に花が笑みこばれ重人
盲人の女悲しからずやサン格拉斯誓二
年令が我が運命を悟らせる太峰
今日も又資本の顔にパフ叩く徹舟
運命は後つきもなし老夫婦一乃字
スタンプを押しただけの寺まいり敏
コッコツと積木のように金を蓄め秀峰
送別ヘシヤッターまでが酔うている徳松
オフィスを逃げて初夏の中之島笑坊
人生は積木根気で生きているだけ茶々坊
これからの運命たくす人が出来まさじ
信念も努力も運命に打ち勝てず鴨吉

運命と他人あつさりけりをつけ我勝
ひっそりと積木の城に女棲むやなぎ
童心にかえって日曜を子と積木六童子
人生の縮図運命に逆らわず漁人
口裏を合せていてもドジを踏み漁人
見合写真裏をかえして煮えきらず凡々
運命のいたずら恋のすれ違いひる美
初夏の風寝まきのままで子と遊び戸無
スタンプのインクも楽し新入社胡蝶
へそくりの小銭のおしもマイバック八重
老眼の窓口親切でひまかかり喜醉
銀行の肩書信じ嫁に出し蟻香糖
ボナス日ガッチリ知つて家の建ちつや女
銀行のお金を借りて家の建ちつや女
預金する銀行マンの笑顔よし真実

雅号ぶっちゃけばなし(101)

きんふう



西垣錦風

にしがき

私は、昭和十二年四月大阪市南区鰻谷西之町に錦屋宝飾店開業十四年八月応召のため休業する。ソ満国境処林満州第六〇〇八部隊に入隊約三年八カ月軍務に服しました。その間、軍事行動秘密通信はハガキのみにて検閲きびしく、せめて家族に駐屯地のみにても知らせたく、麻生大先生始め同人諸先生方々のお教え頂いた川柳に思いつき、句の中にそれとなく家族のみに暗示できる字句を織り込み、厳寒冷下四〇度の北満の護りより風の便りを出しました。つたない川柳ですが、検閲をくぐる十七文字の有難味、つくづく身にしみ、屋号の錦屋の錦と異国よりの風の便りに感銘を覚え風の一字を組み入れ錦風と致しました。

(会社員 六十歳)

公僕は窓口だけの笑を見せ
ぬつと出た指に似合わぬ声を出し
窓口へ背のびする子の眼が可愛い
窓口の笑顔につられて貯金ふえ
窓口はあるが市政そのまんま
ニコソンの喧嘩窓口にまでからみ
窓口の機械化謝辞の声が無
銀行の粗品小さい貯金箱
銀行ローンでじつくり腰をすえ
真知っているから男のたよりなし
南海電鉄川柳会(大阪市) 辻 圭水報
白タクの行つてやろか恐くなり
乗車拒否させぬ強さで乗り込まれ
穴のあく程顔見からの乗車拒否
乗車拒否覚悟したのにドアが開き
乗車拒否大きなカモを狙つとり
行く先を先に聞いている乗車拒否
乗車拒否横目でマイカー悠悠と
駒つなぎ(大阪市) 岸 南柳報
おかしいと思つたヒモに引っかかり
教会の鐘にさびしき増す圀り
ニココリと笑つて圀り裏へ消え
良い圀り二羽と一緒にとりもちへ
先着の三名さんと叩き売り
事業欲あつて才女の嫁き遅れ
才女とも云われ酒豪とも云われ
旦那には才女も只の甘ったれ
才女だと聞いて居たのがあんな顔
主人よりクイズで嫁ぐブス才女
気も強く才色兼備という女性
才女ぶるママに先生持て余し
悟郎 水子 郎

才女にもなれず嫌みそ臭く生き多津緒
小金貯め才女むなしことばかりみよ
口も手も休まぬ女紅もつけ岳人
才主人の方が才女の世話を焼き宏子
才女なら別れなはれで事が済み巖
万引も才女がやれば記事になり順三
才女つらしか男を振り向かず摩天郎
才女の席のぐるりが空いたまに小松園

丸文川柳会(倉敷市)

竹内翁童報

昼休み口で勝負の名人戦頑念
休日頭に頭の痛い駐車難真佐
日曜に慣れぬ手つきへ苗みだれ真佐
サラリが暦の連休うらんで真佐
連休のプランへ予算ついで頑念
連休に不況知らずの観光地玉仙
一人者休みつつきをもてあまし真佐
教育ママ休みも一日休ませず和夫
週五日金のつづかぬ暇ができ健山
物価高子守に昼寝の日曜日和夫
昇格し日曜日に休まれず黒山
共稼ぎ田んぼが待っている日曜日俊寿
連休が家庭奉仕であわと消え頑念
アメリカに休め休めとすすめられ翁童

城北明朗会

川口弘生報

若人は電話で恋もキスもする渚水
電話する娘に嫉ける未亡人生仏
ソバ寿司中華電話で昼を食う三十四
母からの電話漬物とりに来い弘生
笑い声電話に乗って来る不安葵水
お料理の最中に電話味狂い繁子
恋人と話す電話は声しずか秀村

電話つけ日曜までも呼出され
電話では歯に衣きせず物が云え
赤電話うっかり甘い声になり
生写しなど云われて気に入らず
きらわれて居るとも知らず笑いあい
明日香村遠い昔がよみがえり
わが家にはわが家の味のおつけもの
川柳たけはら

森井善居報

琴の音が心にしみる城下町繁男
ワンマンを自負して反逆児を増やし扇水
悲しみもかきまぜひとりのむ紅茶
貸し借りが互いにおいて無二の友西合
空白の街にハイエナの焦りの誠香
バス停に心和ます句が光り南風
置去りにされそう現代用語買う五湖
亡妻に逢う仏壇の灯をともし郷愁
成人式たしかに選挙権にぎる日出夫
倒れそうな俺を支える二人の子春昇
愛することの悲しき知ってて燃え
口答えるほど息子育つなり蘭幸
木綿着てもめに見せぬお家柄英子
ヒゲそって孫と対話の明日があり大
かくれん坊かくれたつも足が見えかつ子
万難を排した顔で遅参する葵水
愛されて愛して苦労をかける妻雅鳳
行きつけのネオンは読める千鳥足路秋
妻の留守わしの分らぬことばかり峰泉
扶助料が増えたと人はいうけれど
病む人を慰めわたしも病み上り貞子
足踏みをいつまでしてたらベッド
ほれられて妻恋文を宝とす輝子
改己

昭和47年度
第24回 大阪文化祭川柳大会

日時 47年11月19日(日) 10時開場・12時半

会場 中央公会堂 三階小集会室

司会 西田 柳宏子

開会の辞 菊沢 小松園

講演 兼題 「近頃の社会記事から」 俳人 榎本冬一郎氏

「妻」 岡橋 宣介選

「日本語」 堀口 塊人選

「合鍵」 西村 芳川選

「舌」 西尾 栞選

閉会の辞 本多 柳志

席題 当日5題発表(締切正午)

投句 各題2句以内。出句は出席者に限る

(兼・席題共当日会場で受付)

賞 大阪文化祭川柳賞選者賞

句集 入選句集代二百円当日申込受付。

人間の都合で鶏舎夜がない不朽
逆光に立つ裸婦像の神秘めき英詩
電話待つ時計たしかに動いとり浄美
ぬりたてのペンキさわって見たく鬼焼
おそろしや軍国主義の生き残り
お定がさきに値上る暗い春清
星静かなりこよいも一人笑子
平凡に生きて夫婦に悔いがない文明
黙秘権員は上手に殻を閉ざす美佐雄
核時代漢方薬に望みかけ敏恵

女哀れ取越し苦勞の多いこと
今日からは二人砂漠に積む積木
同情に背を向け孤独の日が暮れる
日本のよさを異国で嘯みしめる
たよこにしても積木が役立たず
しわ寄せはいつも庶民と決めており
不景気を乗り切る妻の知恵を借り
身障児の積木崩れても崩れても
核傘下積木の兵隊勢揃い
三人のママとなる日へ胸を張る
こなごなにしても水晶なるひかり
★
寄せ書もうれしく飾る病むベッド
その嘘はうしろ姿に隠せない
建 国 日 深 雪 の 里 日 章 旗
五 湖 南 風

ため息もいためてくれるフライパン
ボーナスを余生に貯める齢になり
雲の墓標君は二十のままで逝き
マイカー族そとの寒さが気にならず
紀元節と言えは自分の齢が知れ
二十年ついでに我慢する夫婦
言い訳を上手にするから疑われ
空の色画いても街の子田舎の子
雲ひとつ泳がせあなただすばらしい
来客に乱れた靴を揃えられ
小さい異仕掛け小心はくそ笑い
繕つてあげる背広に匂う汗
回転のにおい頭で思案する
子供等にかける希望の大きすぎ
水餅に母ののにおいした頃想う
雅 敏 鬼 淨 文 葵 英 春 郷 西
鳳 恵 焼 美 詩 明 水 子 昇 愁 日 出 夫 誠 香 陸 合

雅号ぶつちやけばなし (102)

みよ



岩田美代

いわた

手廻しよく仕事の段取りをつけ句会に走る
日、電車の窓に映る自分を見つめながらふと
笑いかけております。こんな時川柳に誘って下さった
花梢さんを本場に有難く思います。もちろん雅号をく
れたのも花梢先輩。美代と言う名は実は本名です。い
つの程か本名を雅号としました。『隣の美代ちゃんじ
やないでしよか』と休日ミナミで買物をしてました
ら、息子に肩を叩かれてびっくりしたり、又お友だち
からお美代さんと電話。美代と言う可愛い名前前にや
や抵抗する年になりました。お角力さんの世界では、
師を負かす事によって御恩返しするそうです。私も早
く花梢さんに御恩返ししたいと思っていますが、まだ
まだ遠い遠いのはか海の彼方の夢物語です。

(理美容営業 五十歳)

背を向けていても私の好きな人
耳底に軍靴の響き四次防
空虚なる心柳詠と対話する
風紋となつていのちをうたう砂
税のない国に行きたし作りたし
着物きて行くことにするクラス会
気持よいあくび空が青いから
嘘をいうことが嫌いで叱られる
感傷もなくビル街に落ちる陽よ
鉤研ぐ息の白さに雪のおよばず
おやじさん空を仰げば空になり
狂つてのが指導をとり武器を持ち
酒場へと脚の向く日の無事な海
ウインドは娘に着せたい春の色
花嫁の素顔うるわし朝の膳
チャンネルは孫に取られて横になり
ファイトを持てあまして控え室
見つけたい顔番台からにらみ
晴れた日にはくんだ靴を干す
盗塁の気魄で締める靴の紐
洗濯もするから母のしまい風呂
一家を支える靴が光っている
うちの子の出番ヘカメラ身構える
以心伝心おもしろくも夫婦なり
高野山吟行車中吟(塚)
新発意のつもりで喰った普茶料理
精進料理の三千尺の住み心地
精進料理病人向きやなと思ひ
歯応えのないかまぼこを駄と知らず
精進料理だけではお寺儲からず
精進料理母は喜び孫不明
康宏
千百合
政己
清女
凡子
笑子
貞秋
路朽
峰幸
蘭泉
美佐雄
房水
静子
松緑
麴光
宏男
繁太郎
清太
マスエ
そのみ
青居

募集

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十一月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葉選

近作柳樽 (10句) 菊沢 小松園選

課題吟 (各題5句以内)

「通せんぼ」 高木 桃里選

「素直」 渡辺 独歩選

「プロレス」 竹内 圭三選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りま

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葉選

近作柳樽 (10句) 菊沢 小松園選

課題吟 (各題5句以内)

「餅」 花 竹中 肖二選

「浴」 客 野村 岬月選

「腕っ節」 林 葵丘選

川柳忌句会

日時 九月七日 (木) 午後六時

会場 以和貴荘 (いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

兼題 柳 青 寫 眞 話

「内」 「老」 「幕」 「オリンピック」

正 戸 傍 小 吉
本 田 島 浜 圭
水 古 静 牧 井
客 方 馬 人 堂

席題 三題 当日発表

各題三句以内厳守

会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鯉谷仲之町20

川 柳 塔 社

10月の兼題 「王冠」 「パワ」
「乾林」 「繁華街」

10月8日は同人総会と二賞発表

定価 百八十円 (送料十六円)

半年分 千七百七十円 (送料共)

一年分 二千二百円 (送料共)

昭和四十七年八月二十五日印刷
昭和四十七年九月一日発行

大阪府区鯉谷仲之町二〇番地
編集人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

発行所 川柳塔社

大阪府区鯉谷仲之町二〇番地
電話 大阪・二七一一三九八五番
振替口座 大阪・三三六八番

10月8日
会場

心斎橋

北

堺筋

道頓堀川

道頓堀筋

朝日座

松竹座

地下鉄
なんば

地下鉄
日本橋

↑ 自安寺

上 六

・ペンペン草・

★きびしい残暑で、胸の裏っかわに原稿用紙が汗でくっついてくる。こんなある日、姫路の隠岐不酔氏が、菓子さんとよくを塩田温泉へ誘ってくださった。――赤穂御崎の旅館がとれず、急きよ塩田温泉へ変更したのでそうである。

★御務愚劣ということで、「優雅」な時間を与えてくださったが、不酔氏のほかからプレゼントがあり、ま

ったくありがたいことである。愚表にしてみれば、スゴクばくが出世したように思いがいしているようだ。

★品物を贈る立ち場になると、これまたたいへんで、いろいろ苦勞があると思う。それだけに、いただくこちらは平身低頭である。

★小島政二先生のおきんがまた事件を起こした。祝英子夫人にしてみれば病氣だらうが、老巨匠には実にお気の毒である。宿願の「小島源氏」の完成があらふまれる。

★「漫才」誌時代、小島先生には稿料のかわりに菊亭堂の菓子をお送りしていたことをし、二度書いたこと

葉子コーナー

▼鮎の夢前川。その岸辺には合歓の花が咲き、鮎はときどき銀鱗を見せて体をひるがえす。素早い動作です。

▼すがたのよい鮎は旨いです！と不酔様。

▼果物もプロポーシのいいのがうまいそうですよ！と不二田様。

▼耳の痛いこと。

がある。小島先生は菊亭堂の菓子に口をきれないのだ。

★ちやうど今ごろの暑い日だった。小島先生へお送りするため、北浜の菊亭堂へ行ったところ、菊亭堂では売ってくれないのである。

「ここにあるものは、みな昨日お使いの方が見えて買って帰られましたから、いま買っていたいてもムダになります」というのであ

る。

★だが、小島先生がどなたかにあげられるかも知れないから、とにかく送るようにしてほしいと頼んだが、「いくら上手に包装しても形がくずれてしまいます。小島先生から注文がある」と、私が上京する場合など鎌倉へはじききにお届けするのです」と、どうしても売ってくれない。

★さすがのほくも負けてしまつて、やむえず、せつかく来たのだから、秋田先生におみやげにでもと、店にあった甘い物を包んでも貰うことにしたら、これもまた売ってくれない。「ここにあるのは、どこの店にでもある品物ですから、秋にも

う一度来てください、菊亭堂独得のものをたべていただきますから」と、またこぼしたのである。

★気の短いほくが、なぜかすこしも腹が立たないのだ。実にさわやかなのだ。自分が作った菓子に、ここまで愛着と誇りをもちことに「大阪商人はまだ生きてゐる」の感を深くしたからであった。けっきょくほくがたべるといふことで千円だけ買うつもりに包んで買ったところ、百何十円がツリがきた。なぜ千円分包まないのかと聞いたら、数がチゲハゲになるといふのである。同じものでも二つ三つ入れとけば千円

になるのに、どこまでも菊亭堂の主人はハツ曲がりである。

★この名人気質？を川柳とむすぶのは話がキザになるが、独得の味を大切にすることの気風をわれわれも他山の石として素直に受けとってみたいだろう。

★品を贈る苦勞ばなしの一節だが、ほくはいつもいただく側にいるのでまことに相すまぬことである。

★ミニヘンオリンピックに、金メダルを貰う皮算用ばかりしているが、これでは選手団が気の毒だ。九月号の出るころは世界中のテレビがさぞうるさいことであらう。(不二田一三夫)

何を選んでいただくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするの。心に

くい贈物かと存じます



一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

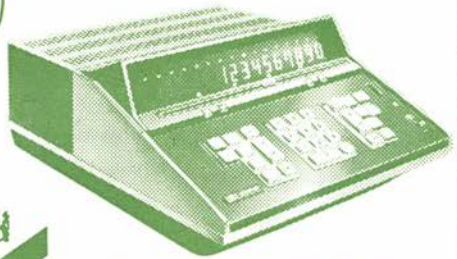
高島屋

昭和四十一年八月二十五日
創刊大正十三年通巻五四四号
第三種郵便物認可
（毎月一日発行）

川柳塔
九月号



タッチでえらべば
やっぱりサコム



見やすい設計 IC C-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリ高級品
SANYO 三洋電機株式会社

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海サービスチェーン

＜ホテル・旅館＞

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| ◆白浜温泉
国際観光旅館 朝 日 | ◆徳島鳴門
国際観光旅館 鳴 門 |
| 国際観光ホテル ホテルパシフィック | 国際観光旅館 鳴門公園ホテル |
| ◆勝浦温泉
国際観光旅館 中 の 島 | ◆紀北橋本
観光旅館 紀 の 川 苑 |
| ◆湯峰温泉
国際観光旅館 湯 の 峯 荘 | ◆泉南淡輪海岸
観光旅館 淡 の 輪 苑 |
| ◆新和歌浦
国際観光旅館 萬 波 | ◆大阪なんば ホテル 南海 |

お問合せ・お申込み 南海交通社
日本交通公社・サービスチェーン
大阪案内所 06-(631)-0222



定価 百八十円 (送料別)